明治前期の東京大学外国人哲学教師の資料調査

――日本における西洋哲学の初期受容に関する調査・分析のために――

西尾浩二

はじめに

本稿の目的は、二〇一〇－二〇一二年度の日本学術振興会科学研究費基盤研究(C)、および同年度の大谷大学真宗総合研究所一般研究に指定されている「日本における西洋哲学の初期受容――清沢満之の東京大学時代未公開ノートの調査・分析――」（研究代表者 池上哲司）の研究を進めるために、明治前期に東京大学で哲学関係の学科を担当した外国人教師に関する基礎資料、とくに彼らの授業に関係する若干の資料を調査し整理することである。

基礎資料となるのは東京大学の『年報』や『一覧』、外国人教師自身が書いた講義ノートや試験問題、著書、書簡、そして講義を受講した学生の残したノートやレポート、回想文などである。外国人教師自身が書いた講義ノートはほとんど残っていないため、それ以外のものを調査分析する必要がある。これらのうち『年報』については『史料叢書　東京大学史　東京大学年報』（以下『東京大学年報』と略す）全六巻[1]としてかなり網羅的にまとめられ公刊されており、講義の内容や学生の状況などを教師が大学長（時期により法理文学部綜理、大学総理、文科大学長など）に毎年報告する「申報」や、どの教員がどの学年のどの学科を担当するかを一覧表にした「教員受持学科表」などによって、当時の講義の概略を知る

ことができる。また、受講生の残したノートからは、じっさいの講義内容をかなり具体的にうかがい知ることができる。

本稿ではこれらの手がかりを組み合わせて調査した途中経過を報告することになる。とりわけ、現存する学生のノートがどの教員のどの年度のものに該当するのかを推定し、できるかぎりの整理を試みる。そのために『年報』に所収の「申報」や「教員受持学科表」など関係文書の一部を資料として抜粋し、本稿の末尾に掲載する（資料一－五）。ただし、当該研究の全体の作業は学生のノートの翻刻と分析を含めてまだ緒についたばかりで現在進行中であるため、この報告での整理も不完全で暫定的なものにとどまらざるを得ない。本来は東京大学外国人哲学教師の主要な一人であるケーベルの講義についても調査研究すべきところであるが、日本における西洋哲学の初期受容という研究主題から、とくに明治前期に焦点を絞ったため、ケーベルについては本稿では主題的には扱わない。

さて、明治期の東京大学で哲学関係の学科を担当し講義をおこなった外国人教師は、次の六名である。まずそれぞれの在職期間を、東京大学庶務部人事課作製の「傭外国人教師・講師履歴書」（東京大学所蔵、以下「講師履歴書」と略す）によってまとめておく。

- サイル：明治七年（一八七四年）十一月九日～明治十二年（一八七九年）四月三十日
- フェノロサ：明治十一年（一八七八年）八月十日～明治十九年（一八八六年）八月一日
- クーパー：明治十二年（一八七九年）四月十一日～明治十四年（一八八一年）七月十日
- ノックス：明治十九年（一八八六年）九月二十日～十二月十日[2]
- ブッセ：明治二十年（一八八七年）一月十日～明治二十五年（一八九二年）十二月二日
- ケーベル：明治二十六年（一八九三年）六月十日～大正三年（一九一二年）七月三十一日

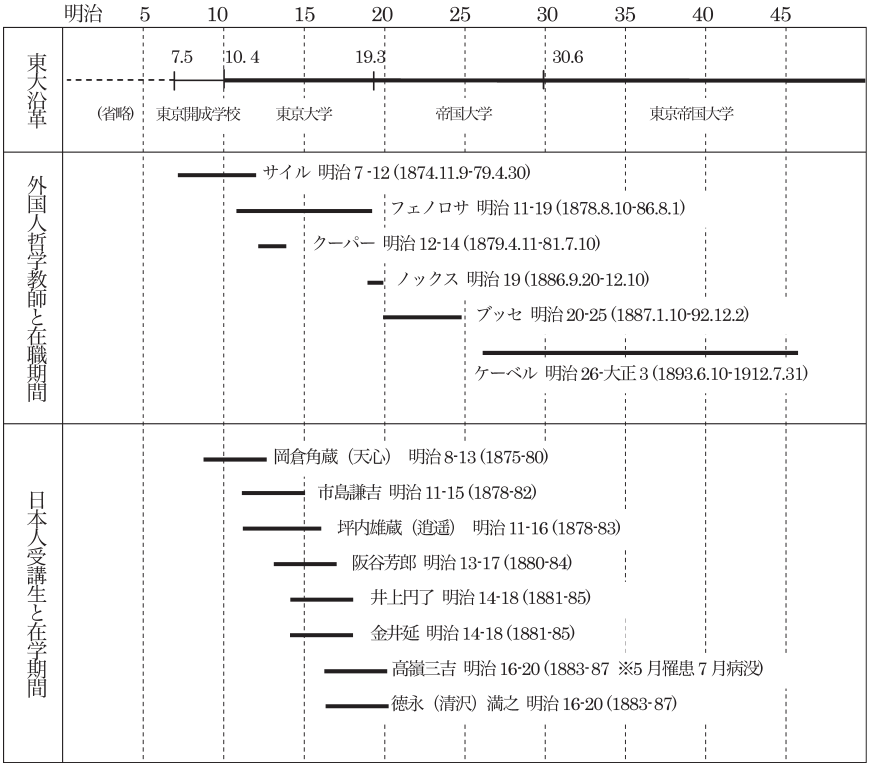
彼ら外国人教師（とくにフェノロサからブッセまで）の講義を受講した日本人学生でノートの現存が確認（または推定）さ

れている者には、少なくとも次の八名がいる。それぞれの在学期間を記す。

・岡倉角蔵（天心）：明治八－十三年（一八七五－八〇年）
・市島謙吉：明治十一－十五年（一八七八－八二年）
・坪内雄蔵（逍遥）：明治十一－十六年（一八七八－八三年）
・阪谷芳郎：明治十三－十七年（一八八〇－八四年）
・井上円了：明治十四－十八年（一八八一－八五年）
・金井延：明治十四－十八年（一八八一－八五年）
・高嶺三吉：明治十六－二十年（一八八三－八七年　※ただし五月に罹患、七月に病没）[3]
・徳永（清沢）満之：明治十六－二十年（一八八三－八七年）

以上の外国人教師の在職期間と日本人学生の在学期間を時系列に並べて一覧表にしたものが、次の表「明治期の東京大学外国人哲学教師と日本人受講生」である。それでは彼らはどのような講義を行い、あるいは受講していたのだろうか。サイルからブッセまでを順にみていくことにする。

（表）明治期の東京大学外国人哲学教師と日本人受講生



一　**サイル**（エドワード・ダブリュー・サイル Edward W. Syle　英一八一七－九〇）

在職期間：明治七年（一八七四年）十一月九日[4]～明治十二年（一八七九年）四月三十日。

サイルが来日したのは東京開成学校に着任するより前のことである。一度目は短期滞在で、二度目が長期滞在となる東京大学時代である。イギリスに生まれ、移住先のアメリカで教育を受けたサイルは、アメリカ聖公会の宣教師として中国（清）へ派遣されるが（一八四五年－五二年、五六年－六〇年）、その間、ペリーの来航から五年後となる安政五年（一八五八年）に一度長崎を訪れている。このときは病気静養が目的の短期滞在であったが、「余は全く日本ファンの一人となりたり」と報告書（The Spirit of Missions, Feb., 1859 に掲載）に記すほど日本に好印象をもち、日本伝道をアメリカ本国に強く勧めることになる。サイルが再び来日するのは、それから十年以上のちの明治三年（一八七〇年）頃とされ、横浜のイギリス領事館付仮牧師およびクライスト教会の牧師となる。また明治五年に横浜で設立された「日本アジア協会（The Asiatic Society of Japan）」の創立にも尽力し、明治九年には副会長となり、明治十二年から十三年には会長をつとめた。けっして若くなかったが（学校着任時五七歳）、平行して東京で教育活動にも携わることになる（以上の点を含めサイルについては小澤（一九六四）や重久（一九六八）に詳しい記述がある）[5]。明治七年十一月九日より「東京開成学校修身学教師」（授業時数一週四時間）として着任、明治八年五月一日には歴史学を加え「修身学及歴史学教師」（授業時数一日四時間）となる（「講師履歴書」）。

ではサイルはどのような内容の講義を行ったのだろうか。これまで手がかりとされてきたのは、講義を受講した学生がのちに残した回想記と『年報』の記述である。たとえば三宅雄二郎は次のように回顧している。

英人エドワード・サイルは明治七年より十二年まで東京開成学校（明治七年開成学校の改称）及び其の後身東京大学に居り、理学及び歴史を受持ち、理学とは後の哲学であつて、ホップキンスの『人論』及びヘーヴンの『心理学』を

教科書にした。歴史の授業時間にも何かにつけて学生に簡易な教訓を与へ、自ら称してCommon Philosophyとした。即ち通俗哲学である。卑近の例を引いて之に理論を付けた。自ら頭が大きくもあり、屢々頭を例にして説明を与へた。割合に多くPhilosophyの語を使つた人として之を挙げねばならぬ。[6]

三宅は「理学とは後の哲学」という。その「理学」の具体的内容として『東京開成学校第四年報　明治九年』の「諸学科要略」に挙げられているのは、心理学と修身学である。

第三年ノ初期ニハ心理学ヲ課シ而シテ第二期ニハ修身学ヲ課ス生徒ハ教科書トシテ「ドクトル、ヘブン」氏所著ノ書ヲ用フト雖トモ又自己ノ解剖分類ヲ以テ其説ヲ述べ又論文ヲ作リ而シテ批評スベシ

ここで理学（心理学と修身学）の教科書とされている「「ドクトル、ヘブン」氏所著ノ書」とは、三宅のいう「ヘーヴンの『心理学』」であり、当時アメリカの大学でも教科書として用いられたジョセフ・ヘヴン『精神哲学』（Joseph Haven, *Mental philosophy : including the intellect, sensibilities, and will*, 1857）のことである。このヘヴンの著書は、明治八年に西周によって翻訳され、『癸般氏著心理学』として文部省より刊行される。また三宅の報告するホップキンスの『人論』とは『人間研究概説』（Mark Hopkins, *An Outline Study of Man; Or the Body and Mind in One System*, New York, 1873）であろうか。これらの著書は「精神の解剖学」を目指したトマス・リードを代表とするスコットランド常識学派（Scottish school of common sense）の影響を強く受けている。「又自己ノ解剖分類ヲ以テ其説ヲ述べ」という『第四年報』の記述も、三宅が紹介する「自ら称してCommon Philosophyとした」というエピソードも、おそらくそこからきているのだろう。『東京開成学校第二年報　明治七年』では、修身学が「モヲラル、フィロソフヒー」ともいわれ、当時の専門学科（法学・化学・

工学）の本科課程第二年（中級）に課されている。この‘Moral Philosophy’という今なら「道徳哲学」と訳される語は、のちに明治十四年四月発行の『哲学字彙』（東京大学三学部印行、井上哲次郎ほか編）で「道義学」という翻訳が当てられているが、すでに十一年度の「教員受持学科表」でもサイルと後任のクーパーの担当学科名が「修身学」から「道義学」という名称に変わっている（資料五を参照）。十九年度以降は「倫理学」となっており、学科名が修身学、道義学、倫理学と変遷していく様子がうかがえる。

修身学や心理学と同じく歴史学についても、サイルがどのような講義をしたのか、回想記や『年報』だけからはあまりよくわからない。『東京開成学校第三年報　明治八年』の「諸教授申報抄訳」には、学生が修めた学科目として、「修身学講義」「ヘーヴン氏心理学」「ファウレル氏論理」「ギゾー氏開化史」「スミス氏希臘史」「ヒューム氏英国史」「スミス氏英国史」「グードリッチ氏英国史」「ギルマン氏万国史」「ウィルソン氏万国史」「グードリッチ氏法国史」「ジュグドレー氏法国史」「太古史」などが列挙されている。しかし、フランス人のレオン・デュリー（Léon Dury）も文学と歴史学の教授として、明治八年四月四日から明治十年四月三日に満期解職となるまでの間、サイルと同じく史学を担当している。両者の細かい分担までわからない。ただ、サイルは予備門でも歴史を教えたが、高田早苗がその予備門での話として、大憲章（マグナ・カルタ）にまつわる講義をサイルがしたことを回想しているから、英国史をサイルが担当したことは知られる。[7] 当時は一年生の一学期に『ステューデント・ヒューム』（David Hume, *The Student's Hume. A History of England from the earliest times to the revolution in 1688*, New York, 1859）を教科書に英国史を学び、二学期にチェンバースの仏国史を学ぶことになっていた（『第四年報』）。デュリーが去ったのちの明治十年度には、史学担当はサイルだけになるから、これらの講義のかなりの部分を彼が担ったことは間違いなかろう。なお当時の学年は九月に始まり翌年の七月に終る（明治時代を通じて同じ）。学期は二学期制（九～二月、二～七月）で十二年度を境に三学期制（九～十二月、一～三月、四～七月）に変わる。

回想記や『年報』を手がかりとするこれまでの調査研究ではわからないことも多いが、その穴をいくらか埋め、サイ

ルの講義内容をこれまでよりもう少し具体的に教えてくれる資料が、アメリカのギャローデット大学（Gallaudet University：世界で唯一のろう者・聴覚障害者の学生のための大学）に残っている。同大学のGallaudet University Archivesには、サイルが教会関係者や家族と交わした書簡をはじめとしてサイルの文書類が収集保存され、10のseries、29のbox、多数のfolderに分類整理され公開されている（*Gallaudet University Archives, Call Number : MSS 66 : Papers of Edward W. Syle, 1758–1906*）。その一部を本稿の脱稿直前に入手した（資料一：個々の文書を25-7のようにbox-folderで示す）。このサイル文書からいくつかのことがわかる。

哲学関係では、学生のレポートと思われる四つの英文原稿（25-7; 25-8; 25-15）から、比較的初期のサイルの講義内容と教育の実態を垣間見ることができる。このうち三つはいずれも一八七六年四月中旬の日付がある。明治八年度の心理学か修身学のレポートであろう（あと一つは年代不明だがおそらく同様だろう）。先ほど引用した「自己ノ解剖分類ヲ以テ其説ヲ述べ又論文ヲ作リ而シテ批評スベシ」という指示に対応する学期途中の課題と思われる。レポートの執筆者は化学科と工学科の二年生である。当時は法学・化学・工学の三学科制で哲学科どころかまだ文学部もなかった。内容は今後詳しく調べる必要があるが、「自然における人間の位置はいかなるものか」「人はあらゆる生き物のうちでもっとも高等である」「動物は知性をもつか」「具体的観念と抽象的観念」といった論題だけからでも、Mental Philosophy（Intellectual Philosophyないし Mental Science）に関するサイルの講義内容が一般教養的なものだったことを部分的に推測することができよう。また、このレポート本文には本文と異なる筆跡（鉛筆書き）でおそらくサイルによるかなり丁寧な英文添削の跡があり、さらに本文の後ろにも添削と同じ筆跡で講評が記されていて興味深い。たとえば、あるレポートの後ろには英文で「そのまま写しすぎのため、ほとんどレポートとみなせない。独自性に欠ける（Copied too closely; so that it can hardly be considered an Essay at all: it lacks originality）」とある。学生には手厳しい講評だが、レポートを調べてみるとなるほど、たくさんの具体例（ミツバチ、鳥、アリ、犬、ビーバー、クモなどの巣作りや帰巣行動）に基づき動物の本能がいかに

人間の知性と質的に異なるかを論じているが、じつはヘヴンの *Mental philosophy* の本能についての章（'Instinct —— The intelligence of the brute as distinguished from that of man' pp. 330-341）から英文を抜き出して再構成したものと判明、サイルがこの本を実際に授業で使っていたことを写しすぎのレポートが実証的に裏づけてくれた。

サイル文書から入手した試験問題(22-13)は、活字印刷された三種類の史学の試験問題で、いずれも年代不明だが東京開成学校時代のものでサイルの署名付きである。この試験問題からわかるのは、『第三年報』に列挙された学科のうちで「ヒューム氏英国史」「グードリッチ氏英国史」「ウィルソン氏万国史」の少なくとも三つは確実にサイルが担当したことがある、ということである。これらはいずれも（ギゾー「開化史」も含めて）すでにサイル着任前に英法科予科の学科教授書籍に挙がっているから（『東京開成学校（文部省年報収録分）明治六年』）、サイルも前例に従ったのだろう。出題の中身は万国史がローマ帝国衰退までの古代史、あとの二つがケルト人の時代からヘンリ二世ないしリチャード一世までの英国史であり、講義の概略が推察できる。ヘンリ二世までというのは、『ステューデント・ヒューム』（全六巻）の第二巻までの内容である。英国史については民族の移動に着目した出題が多く、「此人は私たちに歴史を教へたが、困った事には、いつも『人種の移動』といふ事の話ばかり繰返して、私が教授を受けて居た一年許りの間、同じ問題が屢々繰返された」という高田早苗の証言を具体的に裏づけている。

明治十二年二月三日から八日までの試験（つまり十一年度一学期の期末試験）の時間割表（22-12）からわかるのは、十一年度の「教員受持学科表」にあるサイルの史学講義の中身である。それは開化史（文明史）History of Civilization（第二年級）とローマ史 Roman History（第三年級）であった。第一年級は試験の時間割表にも History とあるだけだが、おそらく例年通り中身は英国史だろう。二学期の史学と道義学をサイルから引き継いだクーパーが仏国史を講義したと報告しているから（十二年度申報「法学及文学一年生ニハ余特ニ仏国史中路易十三世即位ノ時ヨリ路易十四世ノ治世終期マデヲ講授」）、結局、第一年級の史学は、一学期にサイルが英国史を、二学期にクーパーが仏国史を講義したのである。第二年級

の開化史はギゾーの著書を用いたものか（『第三年報』から推測）。また第三年級のローマ史については、ギボンの著書をもとに講義したと推測される。というのは、後任のクーパーがギボンの『ローマ帝国衰亡史』の途中から始めているからで（十一年度申報「文学部第三年級ノ生徒ニハ修身学及ビギボン氏所著羅馬帝国史ヲ講授セリ但シ羅馬史ニ於テハダ井ヲクレシャン帝ノ欧州憲法大変革ノ時ヨリ始メ」）、そこまでは一学期にサイルが終えていた、という推測が成り立つ。事実、次にみるとおり、彼らは引継ぎをするタイミングで情報交換している。

サイル文書に後任のクーパーからサイルに宛てた三通の書簡がある（2-23）。詳細な分析は今後おこなっていくが、さしあたり本稿との関連では、クーパーの着任四日後に横浜のセントラルホテルで書かれた書簡（15 April 1879）が興味深い。クーパーが講義で使う教科書に触れているからである。「昨夜たいへん親切に教えてくださった情報をじっくり考えてみました」と切り出したクーパーは「（昨夜は思いつきませんでしたが）アリストテレスの『〔ニコマコス〕倫理学』（'Aristotle's Ethics'）が学生の教科書にきわめて適切だと考えます」と述べ、その理由を「この本は英国の大学で道徳学を学ぶ学生たちにいま広く読まれていますし、ですからもちろん私もこれならやりやすいですし、一般的な問題を論じるには、私の知る限り最適な拠り所になってくれるでしょう」と説明している（書簡の前半部分）。そしてこの書簡のとおりに実行された（十一年度申報「修身学二於テハ殊ニアリストートルノ倫理ヲ講述し加フルニ現時英国ニ於ル倫理思想ノ進捗ヲ略述セリ」）。さらに書簡の後半では「あなたの授業でしていたこと（work）について少し留意事項をお手隙の折に書いて下さるとありがたいです」と依頼している。サイルとクーパーの在職期間には二十日ほどの重なりがあるため（サイルが四月三十日に満期解雇、クーパーが四月十一日から在職）、また退職後もサイルはイギリスへ移住する明治十三年まで日本（横浜か）に滞在したから、その間に二人は直接に面会してあるいは書簡や電報で情報交換することができた。そのような機会に講義内容についても互いの意見を交わしたのであろう。

二　フェノロサ（アーネスト・フランシスコ・フェノロサ Earnest Francisco Fenollosa　米一八五三－一九〇八）

在職期間：明治十一年（一八七八年）八月十日～明治十九年（一八八六年）八月一日。

フェノロサについてはすでによく知られており、多くの研究や解説があるから多言を要しない。「講師履歴書」にはフェノロサは明治十一年八月十日より「東京大学文学部政治学教師」（授業時数一日四時間以内）として雇われたとあるが、実際には後掲の学科表からもわかるとおり、赴任当初から政治学のほかに理財学と哲学（史）も受け持っている。それが明治十五年八月十日から政治学を外れて「理財学及哲学教師」となり、明治十七年八月十日からは理財学も外れて「哲学論理学の教師」（授業時数一日三時間以内）つまり哲学専任となるに至る。ちょうどその前後に入学したのが清沢満之らである（十六年度入学）。

フェノロサの講義については、自筆の講義録こそ確認されていないが、幸いにも清沢をはじめとして多数の学生がノートを残している。また申報や試験問題といった関連資料もある程度残存し、山口静一（一九七二）（一九八二）（二〇〇〇）が引用し整理してくれている。[8] ただし申報のうち明治十六年度分については、収録されているはずの『東京大学第四年報』が「刊行されたかどうか不明」「存否不明」とされ（山口静一（一九七二）、その年度の申報は山口静一（二〇〇〇）にも未収録である。しかし『第四年報』そのものではないが、それの稿本（文部省提出用の浄書本の写し）が「東京帝国大学五十年史料」（東京大学総合図書館所蔵）に残存し、それを原本に手書きのまま復刻したものが『東京大学年報』第二巻に収録されている（ただし付表は原本に欠落）。そこで参考のためにそこに掲載の明治十六年度フェノロサ申報を本稿末尾に翻刻した（資料二）。[9] ここではそれも参照しつつ、現存する学生のノート、とりわけ質量ともにそろっている清沢満之のノート（西方寺所蔵、以下では参考としてフィルム番号をF001などと記す）と高嶺三吉のノート（金沢大学付属図書館所蔵、全七冊）に基づいて、若干の情報と考察を付け加えることにする。

まず論理学の講義についてみる。論理学はさまざまな学術研究に必要という理由で法理文学部の第一年に課され、法

理学部で半年間、文学部では一年間の授業が「セボン氏著論理学」と「エヴェレット氏著論理学」を教科書として行われた（明治十六年度の『東京大学法文理学部一覧』）。これをフェノロサは明治十四年から、論理学准教授千頭徳馬とともに分担し（それ以前は外山正一が論理学を担当）、文学部生には一年のうちの後半にエヴェレットの論理学書を参考書として教えた（明治十五年度フェノロサ申報「本学年中第一年級ノ論理学ハ第二学期ノ半ヨリ始メ総合論理ニ就テ自選ノ講義ヲ授ケエヴェレット氏著論理学ヲ用ヒテ参考書トナセリ」、十六年度申報「毫モ前学年ニ異ナルコトナシ」）。前半にジェヴォンズの論理学書を用いて教えたのが千頭である（千頭申報）。フェノロサの論理学講義は、秋山ひさ（一九八二）によると、彼が教え始めた明治十四年度のものが十五年三月からの十一回分として金井延のノート（イェール大学バイネッキ図書館所蔵）に残る。[10] 筆者未入手だが、年度の後半の授業であることはこの秋山の報告からも確認できる。

清沢の明治十六年度の論理学ノート（F054-059）によって講義の中身を覗いてみよう。二十六回分の日付不明の講義だが、千頭のものではなく後半のフェノロサのものに間違いない。第一講はこう始まる。

> Gentleman—I am now going to deliver a series of lectures on one of the most important branches of mental philosophy, namely, that which is conversant about the laws of thought. But before entering into the body of the doctrine, I shall give you an introductory lecture, preliminary discourse.
>
> In the first place, you have been learning in the last half academic year, those elementary lesson of logic as would have made you more or less familiar with the rough outline of the science. These are very convenient for me in lecturing you the course which I am just undertaking. I assume, in the beginning, that all of you are thoroughly acquainted with those matters which were given in the little treatise of Mr. Jevons'.

これから論理学の講義をはじめるにあたり、「この半期（the last half academic year）で論理学の初歩（elementary lesson of logic）を学んだ」学生たちに教師が語りかけ、「ジェヴォンズ氏のこの小著（the little treatise of Mr. Jevons）」に書かれていることは知っているものとして授業をおこなう、と伝えている。この前置きから少なくとも二つのことがわかる。ひとつは、教師が後半担当のフェノロサであること、もうひとつは、前半の千頭の授業で使われた教科書がジェヴォンズのいくつかある論理学書のうちでも『論理学の初歩』（W. Stanley Jevons, *Elementary Lessons in Logic: deductive and inductive, with copious question and examples, and a vocabulary of logical terms*, London: Macmillan & co., 1870）であったことである。[11] 他方でフェノロサが使ったのはヘーゲル派のエヴェレットの『思考の学』（Charles Carrol Everette, *The Science of Thought: A System of Logic*, Boston, 1869）である。その証拠に、たとえば第十二講の最後に‘〈Read next time, Everett's Laws of Thought〔*The Science of Thought* のこと〕p. 166–175／Proof and Syllogism.〉’とこの本の予習範囲が書かれているし、また別のノート（F073）にはこの本の目次を活用して清沢が自習した跡がみえる。

第一講でこのあとフェノロサは、論理学（logic）とはどういう学かということから説き起こし、「論理学とは思考の学である（Logic is the science of thought.）」と一応規定したうえで、「思考」をロゴス（logos）というギリシア語の意味にまで遡って説明していく。「思考の学」というのはエヴェレットの書名でもある。この本もまた思考の学やロゴスの意味についての説明から序論を説き起こしている。もっともフェノロサの説明の仕方はエヴェレットにかならずしも依拠しておらず、あくまでも彼流である。授業後半では、中国に「道（Do）」というロゴスに対応するものがあるように東洋でも論理法則は通用すると述べ、他方で西洋では、伝統的にアリストテレスの論理学が重んじられてきたが、今日ではJ・S・ミルやド・モルガン、フィヒテ、シェリング、ヘーゲル、ショーペンハウエルらがその不備を指摘して新しい論理学を打ち立てたと示唆し、第一講を終えている。

第二講よりあとの講義全体の流れも、このように伝統的な論理学から新しい論理学へという大枠に沿っている。全貌

を詳しく紹介することはできないが、多少の言葉を拾ってみる。まず十二講までで、思考の形式のみを扱う伝統的な分析論理学（analytical logic）について、抽象作用、概念と名辞、判断と命題、推論などの観点から解説と批判を加えている。十二講目の最後に先ほどみたように予習を促して、十三講から新しい論理学へ移る。すなわち抽象された形式ではなく自然に実在する事物を扱う総合論理学（synthetic logic）に移り、これをほかの諸学との関係や、肯定（positivity, 正）と否定（negativity, 反）の原理、三分法（trichotomy, 正反合）とその事例、抽象と具体、進化発展（evolution）の過程といった観点から講じている。一年生には大変な内容かもしれないが、毎回授業の初めにかならず前回の復習をおこなう（これは論理学に限らずフェノロサの講義の特徴）など理解しやすいように配慮している様子がうかがえる。

その二年後、三年生にヘーゲル哲学を教えるフェノロサが清沢たちにこう語る。「第三に、思考の過程が三分法だということも、みなさんには論理学の授業ですでに示してあります」（‘Third, I have also shown you in logic that the process of thought is trichotomy.’）。論理学の初歩を学び終えたばかりの学生にヘーゲル派の新しい論理学を手ほどきするフェノロサの講義は‘trichotomy’なるヘーゲル流の考え方を清沢が大学で教わる最初の機会だったのではないか。その意味でヘーゲル哲学受容への第一歩として、この清沢のフェノロサ論理学ノートを意義づけることができるかもしれない。

次に哲学（史）の講義についてみる。フェノロサは哲学史では古代ギリシア哲学とそれに淵源する中世哲学を日本人には益なしとみて省略し（十一年度申報「実際上日本人ニハ大益ヲ期シ難シ」）、現在の思想や問題を知るのによいという理由で（十一年度申報「今日思想発達ノ端緒トモ云フヘキモノナレハ」、十三年度申報「現時ノ実況ニ就テノ問題ヲ明知セシメンカ為メ」）、もっぱらデカルトからヘーゲル、スペンサーに至る近世哲学を講義した。これが初年度から一貫する彼の方針である。

高嶺と清沢が受けた明治十七年度の二年生の哲学史でも、第一学期に哲学と科学の違いをはじめとして哲学史への予備的講義を行ったのち、第二学期から本格的な哲学史をデカルトより説き起こし、スピノザ、経験論（ロック、ヒューム、コンディヤックらフランスの哲学者、ミル）に対する批判へ論を進めている（清沢ノート F067–069, F114–115, 高嶺ノート第六冊、

高嶺によると明治十七年九月下旬から十八年五月二十六日まで約四十八回分）。翌十八年度にはその続きでカント哲学、とりわけ『純粋理性批判』（ミュラーの英訳）にかなり時間を割いたあと、フィヒテ、シェリングの哲学を経てヘーゲル哲学に入り、その後半でヘーゲル『論理学』（ウォーレスの英訳）を講じている（清沢ノート F063-065, F092-094, F060-062, 高嶺ノート第二冊、高嶺によると明治十八年秋から翌十九年六月までの約三十一回分）。[12] この授業の流れはほとんど例年通りである。

清沢ノートのフェノロサ哲学史講義についてはかなり解読が進みつつあり、デカルトからスピノザ批判の途中までの翻刻（村形明子 二〇〇八）とヘーゲル論の邦訳（山口誠一 二〇一一）がすでに公刊されている。[13] これ以外の部分についても翻刻と翻訳および分析の作業を、高嶺ノートの翻刻等と平行して、大谷大学の研究班が現在進めているところである。したがって本稿ではいまだ多くを語る段階にないが、現存する二人のノートの異同を調査し分析すれば、フェノロサの講義をかなり正確に再現できると期待される。試みに清沢ノートのすでに公刊されている部分を高嶺ノートと比較照合してみると、記述内容や図表はかなり一致するが、だいぶ異なる箇所もあることがわかった。聞き取りや書き取りに粗密の差が生じるのは不自然ではないが、相当違う箇所については今後慎重に分析を進める必要があろう。ここでは一例として第二学期第一講の冒頭を引用して並べてみる。この箇所では（最初の部分が高嶺ノートにないことを除けば）二人の記述はほとんど一致する。

（高嶺ノート）[14]

to 13. Feb.

I shall recapitulate very briefly the preceding lectures. In the first place, I have shown you that there is something as philosophy distinguished from science and upon which science must depend. After this I have showed that all problems of philosophy can be included under the problem of essential duality; and therefore

that even for the solution of this problem alone, which is entirely out of the sphere of science and yet without which no science can be possible, there is a pressing necessity of philosophy.

（清沢ノート）

Philosophy. 2nd Term.

By Prof. Fenollosa

I am going to lecture on the continuation of the Lectures on the History of Philosophy. I have terminated the preliminary matters in the lectures of the Last Term and am now in the position to take up the proper history of Philosophy. But before going into it, let me briefly recapitulate the essential points of the course of previous lectures.

In the first place, I have shown you that there is *something as philosophy*, distinguished from science, and upon which science must rest. After this I have shown you that all problems of philosophy can be included under the *problem of essential duality*; and therefore that even for the solution of this problem alone, which is entirely out of the sphere of science, and yet without which no science can be possible, there is a pressing necessity of philosophy.

ここで復習されている一学期の講義内容は高嶺ノートに確認され、現在翻刻中である。清沢ノートには現在確認中だが、整理が進めば見つかると予想している。フェノロサの哲学史講義については稿を改めて論じることにする。

三　**クーパー**（チャールズ・ジェームズ・クーパー Charles James Cooper　英　生没年不詳）

在職期間：明治十二年（一八七九年）四月十一日～明治十四年（一八八一年）七月十日。

クーパーは明治十二年四月に学年の途中から、三年契約で「東京大学文学部哲学及史学教師」（授業時数一日四時間内）として招かれ、十四年七月に依願により解約帰国している（「講師履歴書」）。その二年余りの在職期間中に提出した彼の申報（三年分）がすべてそろって残されている。それを本稿末尾に引用する（資料三）。

申報によると、クーパーの担当は史学（内容は法学部文学部一年生の英国史と仏国史、文学部二年生の英国憲法史と史論、文学部三年生のギリシア史とローマ史）、修身学（「教員受持学科表」では道義学と記されている）、心理学、哲学である。史学関係の授業を多く受け持ったようだが、哲学関係では、すでにサイルのところでもみたとおり、赴任した明治十一年度の修身学でアリストテレスの倫理学と近代英国の倫理思想を文学部三年生に講義している。また翌十二年度には、文学部四年生にデカルト、スピノザ、ヒューム、カントの哲学を講義し、とりわけカントのクリチーク（『純粋理性批判』）に多くの時間を費やした、と報告している。[15]

しかし申報はすべて残っていても、クーパーの講義内容を詳しく教えてくれる自筆の講義原稿や学生のノート類はほとんど残っていない。学生のノートとして、阪谷と坪内のものがあるくらいである。フェノロサやブッセの申報に比べてクーパーの申報に特徴的な点のひとつは、講義内容を記すだけでなく、目についた学生の名前を挙げて論評していることであるが（ただし学年暦の途中に赴任したため学生を知る機会が少なかった明治十一年度を除く）、阪谷もその一人である。明治十三年度の申報でクーパーは、一年生のうちで「大ニ後来ノ望アルモノ」の一人として「坂谷芳郎」の名前を挙げている。このときのクーパーの講義は欧州の歴史、とくにルイ十四世以降の仏国史（クーパー申報）であったから、筆者未見だがおそらくこれを筆記したものが「阪谷芳郎関係文書」（国会図書館憲政資料室所蔵）に含まれる「英国史」（二冊）と「仏国史」（二冊）であろう。サイル着任の頃から東京大学では、法学部と文学部の第一年に英国史と仏国史を学ぶこと

になっていた（前年度の申報でクーパーも「法学及ヒ文学第一年級ハ予定ノ度ニ従ヒ第一学期ヲ以テ英国史ヲ攻メ第二第三ノ二学期ヲ以テ仏国史ヲ修ム」と明記している）。なお周知のように同関係文書には十四年度のフェノロサ哲学史講義（現存部分はカントからヘーゲルまで）も含まれ、そのうちヘーゲル論を中心とした部分の解読と翻訳がなされている。[16]

坪内のノート（早稲田大学演劇博物館所蔵）にも、わずかではあるがクーパーの講義の筆記が残っている。坪内ノートの保存用木箱に貼られた解説文には、ノートが寄贈された経緯とともに、フェノロサだけに焦点を絞って、坪内が「フェノローサの講義を三年間聴いた」事情などが記されている。「明治十二年の九月（本科二年の新学年）から哲学史を、翌年からは政治学、理財学を学び、此理財学の試験に落第したので、本科三年を再修して又理財学の講義を聴いた。此ノートブックには哲学史の筆記がある。フェノロサは、恩師 Francis Bowen の著『近代哲学』により、デカルトよりハルトマンに至る哲学を講じたのであった」と。しかしより詳しくみると、このノートは哲学史や史学など複数の講義が入り混じっている。ノートの最初の部分は、経験論批判やスピノザ、カント、シェリング、ヘーゲル、スペンザーの進化思想などへの言及を含む哲学史である。次に、誰のどの講義に関係するか不明だが中国音楽と音楽に関する三頁分の筆記（百科辞典からの抜粋と判明）[17]などをはさみ、再び ‘Hegel: his philosophy’ という見出しで哲学史へ戻る。これら哲学史の部分は明治十二年度のフェノロサの講義である。そして最後の四頁ほどは英国史に関する内容で、‘LECIV By Prof. Cooper’ と記されている。クーパーが明治十二年度に文学部二年生におこなったと報告している英国憲法史の一部だろう（クーパー申報「同第二年生ハ月曜木曜ノ両日ニ英国憲法ヲ水曜日ニ史論学ヲ攻習セリ」）。固有名（Princess Mary, Sir Thomas More, Fisher bishop of Rochester, Elizabeth Barton, Henry the 8 などの名前が見える）や文脈から、十六世紀の英国でトマス・モアやジョン・フィッシャーらが国王ヘンリ八世と対立する歴史的経緯を講じたものと読み取れる。前年度の申報から推測すれば（もし講義内容に変更がなければ）、この講義の全体は近世史教授スタッブ（William Stubbs）の著書に基づいていることになるが、実際にどうであったかまでは今のところわからない。

鉛筆で乱雑に走り書きされた坪内のノートは、容易には判読しがたいし断片的でもあるが、来日間もないクーパーやフェノロサの初期の講義がどのようなものであったかを知るための貴重な資料のひとつであることには変わりない。けれども柳田泉（一九六〇、九四-九五頁）がほんの一部の翻刻を試みただけで、全部を解読したという話はまだ聞かない。[18] 若き坪内が「如何にこの哲学史の聴講筆記に苦汁を滴らしたか」（柳田）という興味を別としても、歴史的・文献的価値のあるものなので、清沢や高嶺らの質量そろったノートの解読が進展しつつある今、坪内ノート全体の翻刻にも着手するべきだろう。ほかのノートとの比較照合などにより坪内ノートの解読と整理が進めば、少なくともフェノロサが早くから学生に伝えようとしたのはどういった論点かを知ることができる。たとえば清沢と高嶺のノートで「すべての哲学の問題がそこに含まれる」とフェノロサが主張していた‘essential duality’（本質的二元性）の論点は、すでに坪内のノートに登場している。十二年度のフェノロサ哲学史講義の全体を残した者はいないので、デカルトとスピノザの部分（九月二十日から十一月五日までの九講分、そのうしろにボウェン『近世哲学』のライブニッツ pp. 99-117 とバークリー pp. 141-2 の抜粋）だけが残る市島謙吉のノート（早稲田大学図書館所蔵）に対して、坪内ノートはヘーゲルをはじめとする後半部分を不十分ながら相互補完的に提供する資料となりうるかもしれない。他方、とにかくクーパーの（とりわけ哲学関係の）講義については資料がきわめて乏しい。今後の新資料の発掘が待たれる。

四　ノックス（ジョージ・ウィリアム・ノックス George William Knox　米一八五三-一九一二）

在職期間：明治十九年（一八八六年）九月二十日～十二月十日。

ノックスは明治十年に長老派宣教師として来日し、十四年より東京一致神学校（十九年から明治学院、現在の明治学院大学）で神学を教えていたが、十九年にはちょうど同年齢のフェノロサにかわって帝国大学でも教鞭をとることとなった。「講師履歴書」には「文科大学講師 哲学、審美学」とある。ただし洋行のため、ノックスの在職期間はわずか三ヶ月にも満

たない。このような短期間の在職では申報を提出する機会もなかったのであろう、短い報告すら残っていない。そこでノックスの講義内容を知るための資料として重要になるのが学生のノートである。[19]

清沢と高嶺がノックスの哲学と倫理学（審美学ではない）の講義を残している。まず高嶺ノートの哲学講義は、'Philosophy Lectured by Nox v.I 28. Sep. 86. S. Takamine' とノックスの名が明記された頁に始まり、明治十九年（一八八六年）九月二十八日から十二月八日までの約二九回分がある。内容はロッツェの哲学で 'The philosophy of Lotze is contained in his Microcosmos' という文に始まり、この『ミクロコスモス』(Herman Lotze, *Microcosmus: an essay concerning man and his relation to the world*, vol. 1-2, tr. E. Hamilton & E. E. Constance Jones, Edinburgh: T. & T. Clark, 1885, 1888) を論述の流れに沿って（まとめたり飛ばしたりしながら）解説している。少し拾えば、彼の機械論的自然観から魂や意識、身体と魂の関係、さらには自然の進化、人間の創造、歴史の意味、歴史の始まりと発展の外的条件、歴史の発展までの解説である。ただし、きちんと清書されているのは歴史の発展の途中までで、十一月二十九日の分が欠席（absent 29. No）のため空白となってから最後の四、五回分は乱雑な下書きだけが残る。それは歴史の発展の具体論の箇所で、定住文明と東洋の遊牧民、セム系・インドヨーロッパ系種族、古代ギリシア、ローマ、ヘブライ人とキリスト教、中世のゲルマン国家、近代の性格と問題と困難、という項目の順に論じられ、最後に講義全体の結論が提示される。

清沢にもロッツェに関する講義のノートがある（F085-088）。ノックスの名前は記されていないが、高嶺のノックス哲学講義とまったく同じ一文に始まり、まったく同じ内容であることから、ノックスの哲学講義と特定される。二人のノートは内容だけでなく細かい言葉遣いも判で押したように同じであるから、よほど聞き書きしやすいゆっくりとした口述だったか、あるいはむしろ共通の誰かの（学友かノックスの）ノートが回覧されたかであろう。ただ異なるのは歴史の発展の部分である。高嶺が欠席のため空白となった分（上記の古代ギリシアの途中まで）が清沢ノートにはあり（またそのあとの分も高嶺ノートよりも読みやすい形で残されており）、逆に高嶺ノートの十二月六日以降の下書き部分（ヘブライ人とキリスト

教よりあと）が清沢ノートにはない（現段階で確認できない）。清沢ノートに確認できない部分も今後の整理が進めば見つかると予想するが、しかしもし見つからなくても、高嶺と清沢のノートを相互参照することでノックスの哲学講義はほぼ完全に再構成されうるだろう。

倫理学の講義は、明治十九年（一八八六年）九月二十二日から十二月八日までの二九回分がある。[20] 高嶺ノート内の日付（28./Sep./86. など）、'Ethics by Nox vol. II S. Takamine' という記名、さらに Lecture VI (continual) の冒頭に引用された英文の末尾にある '(quotatinal part is Dictationed by Nox)' という注意書きから、ノックスの倫理学講義に間違いない。[21] 中身は、九回まではプラトン（イデア論、『国家』、倫理学などについて）、一〇回から一四回まではスピノザを集中的にとりあげている。一五回目に conclusion としてまとめを行ったのち、'An Essay Ethics of Spinoza Compared to Plato till 12. November' と記されている（次に述べる清沢ノートの調査から英文レポートの課題と提出期限と判明）。一六回からはコントの知識哲学に主題が移るが、次第に清書されずに鉛筆による乱雑な下書きや空白のみとなっていく。

哲学講義と同じく、清沢も倫理学講義のノートを残している（F103-106）。これも高嶺ノートとの比較照合から、同じ年のノックスの講義と特定される。ただし全体の内容は同じだが、細かな言葉遣いは、ほぼ一致する箇所と全然一致しない（ように見える）箇所とがある。いずれにせよ、高嶺ノートでは不完全だったコント哲学の部分はこれによって知られる。またこのノートの最後に 'The Ethics of Spinoza compared with the Ethics of Plato;Their Points of Resemblance & Contrast. 12th Nov. と書かれていることから、清沢が帝国大学文科大学三年生（実質は四年生）のときに書いた同名の英文レポート[22]（日付は明治十九年十一月十二日）がノックスのこの倫理学講義に基づいていることがわかる。げんにノートと合致する説明と図がレポートにもみられる。

短い在職期間のわりには、このようにノックスの東京大学時代の講義を知るための資料は比較的よく残っているといえる。ノックスはまた、日本や東洋、神学（キリスト教）や宗教、道徳などに関する著書あるいは口述筆記を多数出版し

ている。そのうち石川彝が筆記した『道徳之大本：納屈士氏演説筆記』（米國聖教書類會社、一八八八）は明治十七年三月に明治会堂で行われた演説で、キリスト教の立場からエピクロスの快楽主義と並べてスペンサー批判を展開するなど、東京大学での講義とは別の側面がみられて興味深い。

五　ブッセ（ルードヴィヒ・ブッセ Ludwig Busse　独一八六二－一九〇七）

在職期間：明治二十年（一八八七年）一月十日～明治二十五年（一八九二年）十二月二日。

明治二十年にドイツより来日したとき、ブッセは二十五歳の青年で、ちょうどフェノロサが来日したのと同じ年齢であった。それから約五年間の在職期間のうち、明治十九年度から三年分のブッセの申報が残っている。ただし手書きの草稿段階のものである（東京大学所蔵の公文書綴『文部省往復』所収）。それを『東京大学年報』第五巻、第六巻に基づいて本稿末尾に翻刻する（資料四）。「講師履歴書」にはたんに「帝国大学文科大学哲学教師（授業時数一日四時間内）」とだけ記載されているが、『帝国大学第二年報』には「一月九日（中略）哲学論理学心理学倫理学審美学教師ドクトル ルドウィヒ フッセ来着ス」とあり、明治十九年度のブッセの申報にも「論理学哲学審美学倫理学教師ブッセ氏申報」とあるように、当初からさまざまな学科を担当している。

明治二十年一月に学年の途中から来日したため、明治十九年度のブッセの講義は二学期からはじまることになる。この赴任したばかりの頃のブッセの講義を清沢や高嶺が聴講しノートを残している。

清沢には巻頭に 'Lectures on Ancient Philosophy By Dr. Busse' と記されたノートがあり、明治十九年度のブッセの哲学講義であるとわかる。高嶺も同じ講義を聴講していたらしく、同じく古代哲学をテーマとするノートを残している。[23] 両者を比較照合したところ、内容から細かい言葉遣いに至るまで判で押したようにほとんど同じであることがわかった。これはブッセの方針によるところも大きいかもしれない。ブッセははじめ「口述の方法」を用いて重要な所を学生に筆

記させていたが、のちには時間の節約のため、みずから「写字器」（今でいうコピー機か）を買って彼の筆記を摺写し学生に配ったのである（明治十九年度ブッセ申報）。

二人のノートの内容を概観しておく。ブッセの講義スタイルからか、きわめて系統的に整理されている。まず'I Pre-Socratic Philosophy'（ソクラテス以前の哲学）では、イオニアの哲学、ピュタゴラス派の哲学、ヘラクレイトス、エンペドクレス、原子論者、ソフィストについて整理され、続く'II Flourish of Greek Philosophy'（ギリシア哲学の最盛期）では、ソクラテスの生涯と哲学からメガラ派・キュニコス派・キュレネ派、プラトンの生涯と学説（問答法、自然学、魂論、倫理学、政治学）、アリストテレスの生涯と学説（形而上学、自然学、魂論、倫理学、政治学）まで順に系統立てて論述されている。これは「第二年第三年両級ニハテールスヨリアリストートル迄ノ古代哲学ノ沿革ヲ講授セリ」というブッセ申報の第二学期の報告に一致する。第三学期に扱われた'III Post Aristotelian Philosophy'（アリストテレス以後の哲学）についても、申報のとおり、エピクロス派（論理学、自然学、倫理学）、ストア哲学（論理学、自然学、倫理学）、ギリシア懐疑主義、新プラトン主義（ピロン、プロティノス）までの詳しい論述が残っている。古代哲学はフェノロサが詳しく講義しなかっただけに、このブッセの講義が清沢にどの程度の影響を与えたのかは興味深い。今後、調査分析を進める。なお三学期の残りの期間でブッセはデカルトからショーペンハウエルに至る近世哲学の要点も教授しているはずだが（ブッセ申報）、ノート中には未確認であり、これについても調査を進める。

清沢と高嶺は、記名のないAesthetics のノートも残している。二人のノートを比較照合してみると、やはり細かい言葉遣いに至るまで判で押したように同じである。ブッセの審美学の講義を筆記したものであろう。ノートの内容が明治十九年度のブッセの申報とぴったり一致するからである。[24] ノートを概観すると、美の概念についての説明に始まり、短い'I Music'に次いで'II Architecture.'ではギリシアの建築様式、ローマ建築、初期キリスト教建築とビザンチンの建築、アラビア建築、ロマネスク様式、ゴシック様式が順に論述され、続く'III. Sculpture or Plastic'では、古代（ギリ

シア、ローマ）、中世（初期キリスト教、ゴシック）、近世（ルネサンス、バロック、十九世紀）の各時代の彫刻が整理されている。

ほかにも清沢ノートにはブッセの授業に関連すると思われるものがいくつか見当たる。さしあたり二つ挙げておく。ひとつはロッツェの『ミクロコスモス』の要約的抜粋である（F236＝最初から約九〇頁までからの抜粋、F238＝四四頁まで（F236の清書か）と一四五から一六六頁までからの抜粋）。これはノックスの哲学講義の自習用メモというより、おそらく明治十九年度にブッセの講読ないし演習の授業を受けたときのものだろう（ブッセ申報「随意科トシテロッツェ氏「ミクロコズム」巻一ヲ講読論議セシメタリ」）。もうひとつは、二十年度（第三年級、第一期）に行ったとブッセが報告している倫理学講義にほぼ対応する内容の筆記（F239）である。ただし二つとも筆記した人物は清沢でない可能性が高い。二つとも（ノートに黒字ではなく）単紙に青字で記されているが、そのような筆記は（手元の清沢関連資料を見る限り）この二つを除いて清沢にはほとんどまったくないし、また二つとも同じ特徴の筆跡なのだが、清沢の筆跡とは異なるように見えるからである。では、これら二つを筆記した清沢以外の人物とは誰か。ブッセ自身ではないかと推測する（現物は筆者未見のためあくまでも写真に基づく推測）。つまりこれらは「写字器」で刷って学生に配られたブッセの筆記録そのものである。残念ながら頁によっては字が薄くなって、今ではほとんど読めない箇所もある。もっとも十九年度に開講されたのはブッセの報告によると倫理学講義ではなく倫理学演習であり、学生に各自で知りたいことを持ち寄らせて発表させそれをブッセが論評するというものだったので（十九年度申報）、わざわざ筆記録を配る必要などなかった。しかしそれでも講義用に準備しておいた筆記録を演習の授業時や授業外の機会に（みずからまたは求めに応じて）学生に渡したとしても何ら不思議ではない。同じ理由からロッツェの『ミクロコスモス』の要約的抜粋もブッセが配ったものと推測される。哲学演習ではブッセが本から集めた章句について、学生にその論旨と弁護を述べさせたのである（二十年度の申報はそう解されうる）。

ブッセの講義の詳細を知るには、これら学生のノートのほかにブッセ自身の著書も参考になる。ブッセには多くの著

書があるが、とくに注目すべきは東京大学を去った二年後に出版された *Philosophie und Erkenntnistheorie* (Leipzig, 1894) である。ブッセはこの著書の巻頭に「一八八七－九二年に東京の帝国大学で私の講義を受講した者たちに捧げる」という献呈文をつけ、序文の末尾で次のように記しているからである。

この本の中身をなしている研究は、遠い日本で成ったものであり、それも私が東京の帝国大学で哲学教師として一八八七年から一八九二年におこなった講義や演習とかなり密接な関連のもとに成立したものである。だからこれを公にすることは、日本人学生たちの記憶を私の中に呼び覚ましてくれる。私の講義に彼らが興味をもってくれたことが私の励みとなり、そのおかげで私の研究が首尾よく進捗するのに彼らは少なからず貢献した。この本を私のかつての教え子たちに捧げるとともに、それによって、私が大学を去るときに彼らが大いに尊敬と好意を示してくれたことに対し感謝の意を表する。

この本の内容はロッツェ、カント、ヒュームなどの近世哲学と関連が深いが、申報によるとたしかにブッセは東京大学でロッツェ、カント、ヒュームなどを題材に講義や演習を行っている。自筆の講義ノートそのものではないにしても、講義や演習に基づいて成立した著書は、ブッセが東京大学でどのような講義や演習を行ったのか、その一端をうかがい知るための資料となりうるし、学生のノートを今後調査する上でも、たとえばブッセの講義を筆記したノートかどうかを判定する際に参考になるだろう。古代哲学史についてはこの本では扱われていないため、高嶺と清沢が残したノートがやはり重要資料となる。

明治二十年七月、高嶺三吉は他界するが、清沢満之は大学を卒業し、大学院に入学して引き続きブッセの指導を受けることになる（ただし翌年京都府立尋常中学校長に就任）。「大学時代ではフェノロサのヘーゲルの講義が一番面白かったと常

に話されました」（稲葉昌丸、法蔵館版『清澤全集』II、二六五頁）と語られるように、清沢がフェノロサを通じて西洋哲学とりわけヘーゲル哲学を受容し、大きな影響を受けたことは想像に難くないし、指摘もされている（山口誠一 二〇一一）。ではブッセやノックスはどうだったろうか。きわめて不十分ではあるが若干の資料調査から明らかにできた講義や受講ノートの実態から判断すれば、たとえ薫陶を受けた時間がフェノロサより短かったとしても、少なくとも古代ギリシア哲学やロッツェの哲学についてはブッセやノックスから学ぶところが多かったのではないか。清沢が西洋哲学を学問的あるいは思想的に受容する際、フェノロサはもちろんのこと、ブッセやノックスがどのような役割を果たしたのかについても、今後検証する余地があるだろう。

むすび

サイルからブッセまで、明治前期の東京大学で哲学関係の学科を担当した外国人教師たちがどのような講義をしていたのか。それを知るための基礎作業の一環として、本稿では、受講生のノートや教師の申報をはじめとして、新しい資料を含むいくつかの関係文書を調べ、それに基づいて整理と考察を進めてきた。その結果、授業のより詳しい内容や、現存するどのノートに誰のどの授業の筆記が含まれるかが特定されるなど、いくつかの成果が得られた。この成果は、今後のさらなる資料調査のための手がかりとなり、日本における西洋哲学の初期受容がどのようになされたのかを調査分析するというより大きな目的のためにも有益であろう。とはいえ作業はまだ緒についたばかりである。学生のノートの翻刻や分析などの地道な作業を今後も継続して進めていかなければならない。

○資料一――サイル文書

ギャローデット大学所蔵のサイル文書 *Gallaudet University Archives, Call Number : MSS 66 : Papers of Edward W. Syle, 1758-1906* の一部

2-23：C. J. Cooper の Syle 宛書簡（三通 15 April 1879; 26 May 1881; 13 April 1882 私文書につき本文は省略する）

22-12：明治十二年二月の東京大学法理文学部の試験の時間割表（Fenollosa と Syle と Toyama の項目のみ抜粋する）

EXAMINATION TO BE HELD AT THE DEPARTMENTS OF LAW, SCIENCE AND LITERATURE IN TOKIO-DAIGAKU.

2ND MONTH OF THE 12TH YEAR OF MEIJI.

HOUR	CLASS	SUBJECT	PROFESSOR
MON. 3rd			
8-10$\frac{1}{2}$	3rd Year Literature	Political Philosophy	Prof. Fenollosa.
9 $\frac{1}{2}$ - 11$\frac{1}{2}$	2nd Year Literature	Mental Science	Prof. Toyama.
TUEN. 4th			
9$\frac{1}{2}$ - 12	3rd Year Literature	Political Economy	Prof. Fenollosa.

$8\frac{1}{2}$ - $10\frac{1}{2}$	2nd Year Literature……History of Civilization	……Dr. Syle.
$8\frac{1}{2}$ - $10\frac{1}{2}$	1st Year Law and Literature……Logic	……Prof. Toyama.
WED. 5th		
$8\frac{1}{2}$ - 11	2nd Year Literature……History of Philosophy	……Prof. Fenollosa.
$10\frac{1}{2}$ - $12\frac{1}{2}$	1st Year Law and Literature……English	……Prof. Toyama.
$9\frac{1}{2}$ 11	3rd Year Literature……Roman History	……Dr. Syle
11-$12\frac{1}{2}$	3rd Year Literature……Moral Philosophy	……Dr. Syle
THURS. 6th		
$8\frac{1}{2}$ - 10	1st Year Law and Literature……History	……Dr. Syle.
$10\frac{1}{2}$ - $12\frac{1}{2}$	1st Year Science……English	……Prof. Toyama.
FRI. 7th		
8-10	1st Year Science……Logic	……Prof. Toyama.
SAT. 8th		

22-13：史学の試験問題（三種類、年代不明、いずれも活字印刷。以下はその全文）

KAI-SEI GAKKO. GENERAL HISTORY. (WILLSON'S OUTLINES-TO FALL OF WESTERN EMPIER)

PP. 1-253 & 601-763.

1. What are our sources of imformation in regard to the early history of nations?
2. From what point does the population of the World appear to have spread?
3. Name the great Empires of the Ancient World, in the order, in which they became prominent.
4. Give some account of the Empire of Babylon.
5. The Persian and Macedonian Monarchies—their rise and connection.
6. The Roman Empire—its rise, progress and decay.

Prof Syle.

KAI-SEI GAKKO. ENGLISH HISTORY. (STUDENTS HUME.-TO HENRY. II)

1. Describe the earliest inhabitants of the British Islands.
2. The Roman Invation of England, date, duration and general effect.
3. How early did the Saxons settle into England? give some account of Ethelred, Egbert and Alfred.
4. Describe the early contact of the Danes with England, and the reign of Canute.
5. Give the date and circumstances of the Norman conquest, and the character of Milliam. 1.
6. Give an account af Henry Second's course with regard to;

A. The constitutions of Clarendon.

B. The murder of Becket.

C. The subjugation of Ireland.

Prof Syle.

KAI-SEI GAKKO. (HISTORY OF ENGLAND) GOODRICH. TO REIGN TO RICHARD I.

1. Who were anong the first visitors to the British Isles, and what inhabitants were found there?
2. What powerful nation next came to England how long did they remain what did they accomplish?
3. What may be considered as the third invation of British territory?
4. In what manner did the Scandinavian tribes approach England and with what result?
5. What race made a Conquest of England, and under what circumstances?
6. Give the names of the most prominent characters in English History Britons, Romans, Saxons, Danes, Scots, Welsh and Normans down to the time of Richard 1.

Prof. Syle.

25-7：英文原稿（化学科二年生桜井、一八七六年四月十七日）

〈表紙〉'An Essay on Intellectual Philosophy/J. Sakurai/Middle Chemistry class/17th April. 76'

〈内容〉'Have Brutes Intelligence?' と題した手書き英文原稿三校（本文は省略する）

25-8：英文原稿（工学科二年生増田、年代不明）

〈表紙〉‘Essay on Mental Science/Masuda/Middle class of Engineering’

〈内容〉‘Concrete and Abstract Ideas’, と題した手書き英文原稿三枚（本文は省略する）

25-15：英文原稿（工学科二年生関谷、一八七六年四月十日、工学科二年生谷口、一八七六年四月十二日）

〈表紙〉‘Middle class of Engineering/Essay on Mental-Philos./10th April 1876/K. Sekiya’

〈内容〉‘What is the position of Man in Nature?’ と題した手書き英文原稿四枚（本文は省略する）

〈表紙〉‘Middle Class of Engineering/Essay on Mental Philosophy/12th April 1876/Taniguchi’

〈内容〉‘Man is the highest grade of all the creatures’ と題した手書き英文原稿三枚（本文は省略する）

○資料二――フェノロサ申報

※明治十一年度から十五年度については山口静一（二〇〇〇）を参照されたい。

〈明治十六年度〉（明治十六年九月より十七年七月まで）

『東京大学第四年報　起明治十六年九月止同十七年十二月』より引用

教師（理財学及哲学受持）フェノロサ申報

本学年中理財学及論理学ノ教導ニ於テハ其方法毫モ前学年ニ異ルコトナシ

第二年級哲学史ニ於ケルカント哲学ノ教導ハ学生ヲシテ従前ノ如ク同氏著ノ純理論ヲ通読セシムルノ課ヲ減少セシメ以テ余カ口授ニ因リ教導スルノ方法ヲ増加セリ其ノ目的タルヤ第二年級ニ在リテヘーゲル哲学ニ至ルマテノ他ノ哲学講授ヲ了リ以テ第三年級ニ進ミ一層多時ヲヘーゲル哲学教導ニ供センカ為ナリ

第三年級哲学ノ教導ハ先ツカント哲学ヲ復習シ此レヨリヘーゲル哲学ノ時代ニ至ルマテノ独乙哲学々風ノ講究之ニ次キ後チワレース氏ノ翻訳ニ係ルヘーゲル論理学ヲ講授セリ

第四年級ノ哲学教導ニ於テハ余カ目的タル実験哲学ヲ始メテ此級ニ授クルコトヲ得タリ是レ蓋シ前学年ニ在リテ同級生ノ棚橋一郎カヘーゲル哲学ヲ完了セシノ実例アルヲ以テナリ即チ同級ノ課程ハ先ツヘーゲル哲学ノ関係ヲ一般ニ論究シ次テ其ノ他ノ諸流ノ哲学殊ニスペンセル哲学ニ関係アルコトヲ講明シ斯ノ如ク当時最上進ノ諸流ノ哲学ヲ審査論定シ以テ実験哲学ニ於ケル普通一般ノ原理ヲ究覈セリ斯クテ実験哲学教導ニ於テハ道義哲学、政治哲学、審美哲学及簡単ナル宗教哲学ヲ講授セリ但概シテ此等ノ課目ノ講義ハ単ニ其ノ論理法及研究ノ法方皆ナ純正哲学ノ論礎ニ原由スルコトヲ示メスニ過キサルノミ而シテシグウィック著ノ道義哲学及カント著ノ道義形而上哲学ヲ以テ課業用書トセリ

○資料三――クーパー申報

〈明治十一年度〉（明治十一年九月より十二年七月まで）

『東京大学法理文学部第七年報　自明治十一年九月至同十二年八月』より引用

史学及哲学教授シー、ジェー、クーパル申報

余ガ本部ノ生徒ヲ教導セシハ本学年ニ在テ僅カニ其後期ノミ固ヨリ全年ニ及ハザルヲ以テ爰ニ報告書ヲ呈スルニ当リ頗ル困難ヲ免レス因テ今唯管見スル所ノ一班ヲ挙テ左ニ申告ス

文学部第三年級ノ生徒ニハ修身学及ビギボン氏所著羅馬帝国史ヲ講授セリ但シ羅馬史ニ於テハダ井ヲクレシャン帝ノ欧州憲法大変革ノ時ヨリ始メ修身学に於テハ殊ニアリストートルノ倫理ヲ講述シ加フルニ現時英国ニ於ル倫理思想ノ進捗ヲ略述セリ

此級生徒ノ注意ニ厚キト周ク趣旨ニ通暁セルハ余ノ満足スル所ナリ然レドモ其中ニハ往々事実ノ細密ナル件即チ世変ノ関係及緊要ナル年紀等ニ度ルヲ屑トセザルノ人ナキアタハス意フニ斯クノ如キ意思ヲ懐クニ於テハ決シテ歴史上ノ理論ニ通スルヲ望ムヘカラザルナリ

文学二年生ニハ英国憲法史及ヒ史論ヲ講授ス但シ史論ハバックルノ英国開化史ヲ以テ教科書トシ憲法史ハ特ニオックスフォルド大学校近世史教授スタッブ氏カ近時ノ発明ニ係ル緊要ナル事実ヲ尤モ丁寧ニ挙示セリ

蓋シコノ級生徒ノ鋭敏勉励且ツ注意ニ厚キハ他ニ此倫ナシト謂フベシ法学及文学一年生ニハ余特ニ仏国史中路易十三世即位ノ時ヨリ路易十四世ノ治世終期マデヲ講授シ而シテ其成功ノ充分ナルニ満足ス但シコノ級中六七名ト其余トノ間ニハ頗ル学力ニ鴻溝アルヲ覚エタリ

爰ニ報告ヲ終ルニ臨ミ一言セントスル所ハ余ノ始テコヽニ聘セラレテヨリ以来諸生徒ト相接スルヤ常ニ余カ意ヲ満足セシムルモノ多キ是ナリ

〈明治十二年度〉（明治十二年九月より十三年七月まで）

『東京大学法理文学部第八年報　自明治十二年九月至同十三年八月』より引用

文学部教授チャーレス、ジェス、クーパル氏申報

謹デ明治十二乃至十三ノ一学年中ニ於ケル余ノ担掌セル学事ヲ申報ス文学第四年生ニハ余デカルト　スピノサ、ヒューム

及ヒカント氏ノ哲学ヲ講授シ就中カント氏ノクリチークニ於テハ最モ多ク時ヲ用ヒタリ而シテ生徒皆善ク勉励シ殊ニ其草セル卒業論文ノ如キハ構思皆巧ニシテ立意亦剴切ナリ

同第三年生ニハ第一学期中ニギリシヤ史及ヒ心理学ヲ講授シ第二第三ノ二学期ニ羅馬史及ヒ心理学ヲ講授セリ本級ノ生徒ハ皆蛍雪ノ苦攻非常ニシテ就中坪井氏ハ一般ニ最モ其学力ヲ進メ都築氏亦之ト頡頏シテ譲ラス試業及試業外ノ余時ニ於テ許多ノ佳文ヲ草セリ且ツ末岡氏ノ学業ニ関シテモ余甚ダ満足セリ

同第二年生ハ月曜木曜ノ両日ニ英国憲法ヲ水曜日ニ史論学ヲ攻習セリ就中有賀氏ヲ以テ其最トス然ルニ該級中平常疾病ニ因リ欠席スル者少カラズ為メニ自然其勉強ヲ妨ケシハ余ノ甚タ嘆息スル所ナリ又高田氏ハ注意周密其学業ノ余ヲ満足セシムルモノ多ク天野氏ハ試業毎ニ羣ヲ抜キ其ノ平常ノ課業ニ就キ大ニ余カ望ム所ニ過キタリ

法学及ヒ文学第一年級ハ予定ノ度ニ従ヒ第一学期ヲ以テ英国史ヲ攻メ第二第三ノ二学期ヲ以テ仏国史ヲ修ム該生徒ヲ比視スルニ殊ニ法学部ノ生徒ヲ優レリトス就中穂積氏ハ独リ外ノ生徒ヨリモ学力ノ進ムヲ覚ユ是レ蓋シ其ノ英語ニ習熟スルニ因ルナラン木村氏モ亦甚タ後来ニ望アル生徒トナスヘシ

之ヲ要スルニ現ニ法律研窮ノ生徒中疋田伊藤及ヒ磯辺氏ヲ以テ最モ学力ニ富ミ応答ニ巧ミニ且ツ科業ニ通暁セル人ト信スルナリ

余ハ歴史ヲ授クルニ当リ専ラ生徒ヲシテ国勢ニ係ル経済上ノ要件ヲ了解セシメンコトヲ務メ特ニ仏国史ニ於テ其千八百年代ノ反乱ノ際ニ現ハレタル経済上ノ問題ヲ研窮セシメタリ

〈明治十三年度〉（明治十三年九月より十四年七月まで）

『東京大学第一年報　起明治十三年九月止仝十四年十二月』より引用

史学及哲学教師クーパル申報

謹テ本学年ノ申報ヲ呈ス実ニ余ノ此年間ニ提撕親誨シタル学生ハ勉強倦マス且ツ皆礼意慇懃大ニ吾意ヲ満足セシムルモノアリ

余カ全学年中法文学第一年生ニ講授セシ所ノ者ハ欧州歴史ニシテ就中仏国史中彼著名ナル路易十四世以後近時ニ至ル緊要ノ件ニ関シ尤モ学生ノ留意ヲ喚起シ則チ殊ニ平常ノ講義ト時々ノ試業トニ於テ之ヲ研鑽セシメ其業大ニ観ルヘキニ至ル

該級中江木衷、坂谷芳郎、平沼淑郎、久米金弥諸氏ハ共ニ大ニ後来ノ望アルモノニシテ奥田義人、小田貴雄等ノ諸学生モ亦皆勤勉余リアリ殊ニ岩谷驥平氏ノ如キハ級中不群ノ地位ヲ占シガ疾病ニ因テ当学期中ニ欠席セシハ余ノ甚遺憾トスル所ナリ

文学部第二年生ニハ歴史、哲学、並ニ英国憲法ヲ講授セリ抑々本級生徒ハ其初学期ノ始メニ観察セシ時ニハ学力足ラス操志定マラス之ヲ策励スルモ蛍雪ノ苦ニ意ナク之ヲ啓沃スルモ風馬牛ノ態アリ殆ト後来ノ成業如何ニ憂慮セシガ是ハ一時ノ阻滞ニシテ実ニ近数ヶ月ニ渉テハ草思研精大ニ旧態ヲ豹変シ学業蔚然トシテ著ク進歩ヲ呈シ現ニ其考試ニ応スルノ文ヲ観ルニ流暢明快時ニ金声玉振ノ余響ヲ得ルモノアリ余ノ詢ニ嘖稱シテ欣躍スル所ナリ

該級中穂積八束、梅若誠太郎、木村竹次郎、諸氏皆是能ク励精シ其業観ルベシ就中鋭敏ニシテ頭角ヲ露ハシヽハ穂積八束氏ナリ氏ハ洋語ニ所謂「フハーシルプリンシプス」（甚タ労苦セサルモ容易ニ級中ノ首席ヲ占メ得ル天資ノ才識ヲ具フルノ義）ニ背カサルノ人ニシテ余ノ始テ本校ニ職ヲ辱ウセシ以来僅ニ観ルヲ得ルノ学生ニシテ真ニ鉄中ノ錚々ト称スルモ敢テ溢言ニアラザルヘシ

文学第三年生ニハ第一学期中ニ希臘史ヲ授ケ第二第三学期間ニ羅馬史中其共和政治ノ滅亡並ニコンスタンチン帝治世ノ事跡ヲ講授セリ該級中有賀長雄氏ハ天資雋穎嶄然群ヲ抜キ解釈流ルヽカ如ク且ツ能ク苦学ニ堪ヘ殆ト一日モ欠席セシコ

トナシ真崎孝八氏亦能ク業ニ孜々シテ倦マス山田一郎、高田早苗ノ二氏亦共ニ資質穎敏ナリト雖モ其講席ニ欠多ク以テ余ヲシテ充分ノ好成績ヲ見ルニ至ラシメサルハ甚タ歎惜スベシトス文学第四年生中松田小次郎氏ハ堅忍不抜ノ志ヲ抱キテ殊ニ哲学ニ黽勉セシハ実ニ人ヲシテ驚歎セシムルモノアリ本学年末ノ大試業ニ筆答正当ヲ得テ卒業論文ニ鋒芒ヲ露スヘキハ予メ期スヘキナリ末岡精一氏カ殊ニ哲学ノ聴講ニ熱心シテ用意縝密ナルト田中稲城氏ノ殊ニ欧州歴史ノ講義ニ意ヲ留メテ平常ノ業ニ心識黙契ノ領得多キハ倶ニ感歎スル所ナリ

以上陳述スル所ハ実ニ余ノ教導セシ学生ノ概状ナリ抑々本学現時ノ勢ヲ以テ進ンテ止マサレハ将来益俊英ヲ育スルヲ得テ愈々名声ヲ世ニ輝スヘキハ敢テ疑ハサル所トス今ヤ余ハ帰国ニ臨ミ此一言ヲ挙テ本学ノ隆運ヲトシ併セテ久ク諸職員衆学生ノ厚遇ヲ辱ウセシヲ深謝スト云爾

○資料四――ブッセ申報

〈明治十九年度〉（明治十九年九月より二十年七月まで）

『文科大学年報　起明治二十年一月止明治二十年十二月』（『文部省往復（報告）』（明治二十一年）に所収）より引用

論理学哲学審美学倫理学教師ブッセ氏申報

余ハ第二学期ニ於テ第一年級学生ヘハ左ノ課目ヲ教授ス

一　論理学　論理学説ノ沿革史及ヒロッツェー氏ノ所謂形式的純理的折衷的論理ノ大要ヲ講シ純正論理学ニ於テハ印象ノ思想ニ転移スルノ理及概念創成ノ理ヲ講授セリ

二　哲学　ヒューム氏ノ自然教問答ヲ講究論議シテ哲学ノ各問題ニ入ルノ緒ヲ開クヘク務メタリ

第二年第三年両級ニハテールスヨリアリストートル迄ノ古代哲学ノ沿革ヲ講授セリ第三年級ニハ審美学ノ概念志向美ノ

概念及ヒ美術ノ統系ヲ講授ス即チ第一音楽第二建築術第三彫刻術トス而シテ建築術ニ於テハ希臘羅馬古代耶蘇教国「ビザンチン」「アラビック」東洋、「ローマネスク」及ヒ「ゴスック」建築ノ特質ヲ講述シ彫刻術ニ於テハ古代中世及近世ノ彫刻ヲ講授シタリ

参考用書ハ左ノ如シ

ヘルガッソン氏建築学講義

リュブケー氏美術沿革史

シーマン氏建築学沿革史

第三学期ニ於テ第一年級ニハ前期ニ続キ論理学ヲ講述ス即チ断定法推度法合法体類別法工夫及説明（機械的）説ヲ講明シ且ツ前学期ニ続キヒューム氏ノ自然教ヲ講授セリ

第二年級ニハアリストートル以後ノ哲学エピキューロス　ストイック学派希臘懐疑学及新プラトー学派ヲ講明シ加フルニデカルトヨリショーペンハウエルニ至ル近世哲学ノ大要ヲ摘授ス（第三年級モ亦此級ニ合併教授セリ）

第三年級哲学史ハ第二年級ト合併教授セシコト前述スル如シ而シテ審美学ニハ風景画風俗画歴史画及古代中世近代画学ノ沿革ヲ講授ス

参考用書ハ左ノ如シ

リュブケー氏美術沿革史

シーマン氏建築学沿革史

右ノ外随意科トシテロッツェ氏「ミクロコズム」巻一ヲ講読論議セシメタリ

余カ講授ハ初メロ述ノ方法ヲ用ヒ須要ノ分部ハ学生ヲシテ筆記セシメタリシト雖トモ後余自ラ一写字器ヲ購求シテ余ノ筆記ヲ摺写シ之ヲ各学生ニ分付シ時間ノ徒費ヲ節スルコトトセリ哲学演習ニハヒューム氏自然教問答ノ講究ヲ以テス即

チ其方法ハ学生ヲシテ読書章中ノ意味ヲ口述シ而シテ之ヲ論議セシメタリ
倫理学演習ニハ学生ヲシテ各自特ニ知ラント欲スルノ説ヲ以テ分チ以テ各自ヲシテ自説ヲ詳細ニ陳述セシメ然ル後各説ヲ論議批評スルヲ務タリ

〈明治二十年度〉（明治二十年九月より二十一年七月まで）
『文科大学年報　自明治二十一年一月至同年十二月』（『文部省往復（報告）』（明治二十二年）に所収）より引用

教師ブッセ申報

哲学科

一　第三年級

第一期　倫理学

一　緒論、倫理学ノ理想及目的、倫理学上各反対論要点形而上学的及宗教的倫理、人類学的及生物学的倫理、利学、常感的倫理、直覚的倫理、倫理学ト社会学
二　倫理学沿革史大意希臘羅馬（グリコ・ローマン）倫理、中世希督教倫理、「ホップス」「デカルト」ヨリ「スペンサル」「ロッツエ」ニ至ル近世倫理
三　「カント」著メタフィジックス　オフ　エシックス「ショッペンハウエル」著グルントプロブレム　デル　エシック「ミル」著ユーチリタリアニズム「スペンサル」著データ　オフ　エシックス「ロッツェ」著アウトラインス　オフ　プラクチカル　フィロソフィーノ諸書ニ拠リ倫理学上実地演習

審美学

一　緒論、審美学ノ理想及目的美ノ生理的主観的心理的及客観的状態、技芸ノ統系即チ造家術、彫刻術、絵画、音楽、詩

一　造家術　造家術上美ノ状態、東洋造家術、希臘羅馬造家術、「アラビヤ」、古代希督教国、「ビザンチン」及魯西亜造家術、「ローマネクス」及「ゴシック」造家術、欧州中興（バロク、ロッココー）造家術、大十九世紀造家術

用書　「ルブケ」著ヒストリー　オフ　アート「シイマン」著クンストヒストリッシエ　ビルデルバーゲン

哲学演習（哲学科学生ニ限ル）

「ロッツェ」著マイクロコスマス第一巻ヲ講読論議ス

第二期　審美学

彫刻術　模像ノ美ノ状態、東洋彫刻術、希臘羅馬彫刻術、「ローマネスク」及「ゴシック」彫刻術

哲学演習

「ロッツェ」著マイクロコスマスノ講読論議ヲ継続シ「デカルト」ヨリ「ライプニッツ」ニ至ル近世哲学ノ沿革史ニ就キ実地演習ヲ行フ

用書ハ「デカルト」「スピンノザ」「ロック」「ヒューム」「バルクレー」「ライブニッツ」ノ各著書、「ルウィス」著ヒストリー　オフ　フィロソフィー「モーレル」著ヒストリー　オフ　モーデルン　フィロソフィー「ボウエン」著ヒストリー　オフ　モーデルン　フィロソフィー「シュウェグレル」著ヒストリー　オフ　フィロソフィー「ユーベルウェルグ」著ヒストリー　オフ　モーデルン　フィロソフィー「ツェルレル」著ゲシヒテ　デル　ドイッツエン　フ

ィロソフィー「キューノフヒシエル」著ゲシヒテ　デル　ノイエレン　フィロソフィー仝著「フランシス」「ベーコン」
ウンド　サイネ　ナッヒホルゲル「エルドマン」著ゲシヒテ　デル　フィロソフィー「フォルケンベルグ」著ゲシヒ
テ　デル　ニウレン　フィロソフィーノ諸書ヲ用ヰタリ

第三期　審美学

彫刻術　欧州中興ノ彫刻術「バロク」及「ロココー」彫刻術第十九世紀彫刻術
絵画　絵画ノ美ノ状態

哲学演習

「ロッツェ」マイクロコスマス講読及近世哲学沿革史論議ヲ継続セリ

二　第二年級

第一期　哲学史

緒論、哲学ノ理想及目的哲学ノ訓練、哲学史ノ理想及目的、諸学派ノ論拠、経練学派と理論学派トノ折衷論、哲学史上ノ時期、「テーリス」ヨリ「アリストートル」ニ至ル（第一第二時期）古代哲学沿革史

第二期（哲学史続き）

哲学沿革史ノ第三時期「ストイック」「エピキュリアン」「スケプチック」及「ネオプレトニック」哲学中世希督教国、「アラビヤ」「ジウ」哲学沿革史概要、近世哲学、緒論、欧州中興及改革ノ時期「ベーコン」「デカルト」ヨリ「カント」及仏独勃興ノ時期

第三期　哲学史（坪井氏心理学講義ヲ聴聞シタルヲ以テ心理学ニ代フルニ哲学史ヲ以セリ）

カント氏哲学殊ニクリチック　オフ　ピューア　リーゾンヲ講授シ又独逸唯心論派ナル「フィヒテ」「シェリング」「ヘーゲル」及近代ノ哲学家「ヘルバルト」「ショッペンハウエル」「ハートマン」「ロッツエ」（ロッツエ氏哲学ノ解釈ハ次学年第一学期ニ於テ之ヲ授ケタリ）

三　第一年級

第一期

一　哲学ニ関スル一般ノ理論的序論、哲学ノ理想及目的哲学ノ訓練、形而上学、自然哲学心理学論理学及認識論審美学、倫理学、宗教哲学、哲学ノ基則及名辞即チ独断教懐疑学鑑識学、唯心論、実体論、実験理学、唯物論等

二　哲学ニ関スル実践的序論、「デカルト」著メジテーションノ講読論議及引証解釈

第二期　哲学史

緒論、各派反対論要点、理論派、実験派、「ツェルレル」「ボーエン」「ユーベルウェルグ」等ノ折衷論、哲学沿革史上ノ時期、古代、中世、近世各哲学ノ性質ノ大要、古代哲学史「テール」ヨリ「アナクザゴラス」及詭弁家ニ至ル第一時期

論理学

緒論、論理学ノ各基則形而上学的論理、正式論理、折衷説論理学ハ技術ニ非ラズシテ学術ナルコト、論理学ハ心理学ノ一部ニ非スシテ独立ノ学術ナルコト、純正論理学、概念論、断定論

第三期　哲学史

古代哲学史　「ソクラテス」三「ソクラテス」学派「プラトウ」及古代哲学派（第三時期「アリストートル」学派ハ次学年第一学期ニ於テ完了ス）

論理学

純正論理（続き）　推測式理論、推測式及四推測図式、想考的及離接的推度法、帰納法理論及比考、彙類法、論理思想ノ想像的観念、其実現ノ明スベカラザルコト、宇宙ノ論理的構成ニハ先天法ヲ用ヰズ唯経験ノ基礎ニ由ル論理的解釈ヲ用ヰルコト

応用論理（次学年第一期ニ於テス）

摘要

余カ授業上ノ法ハ終始講義ヲ行ヒ加フルニ時〻学生ト問答ヲ為スノ混合法トス問答ノ法ハ論理学ヲ授業スルニ用ユ而シテ講義ヲ解セザルモノハ自由ニ之ヲ質疑スルモノトシ講義ノ要点ハ余自ラ筆記解釈シテ学生ニ謄写セシメタリ

「デカルト」著メジテーション及「ロッツエ」著マイクロコスマスノ実地演習ニハ左ノ方法ヲ用ヰタリ

書中集章句ニ就キ学生ヲシテ順次著者ノ論旨ト之レヲ弁護スル自説ヲ簡単ニ述ヘシメ尚足ラザル処ハ他学生ヲシテ論述セシムルノ後著者ノ定論ヲ論議セシメタリ蓋シ余ハ終始之レニ臨席管督シタリキ

論理学及近世哲学史実地演習ノ方法ハ先ツ各学生ニ用書ヲ配頒シ教師ノ支持スル書中ノ要旨ヲ述シメ而ノ後各著者ノ論旨ヲ比較批評セリ近世哲学史演習ニハ常ニ諸哲学ノ原著書ヲ参考シ又諸哲学歴史家ノ報告ヲモ対照シタリ

〈明治二十一年度〉（明治二十一年九月より二十二年七月まで）

『文科大学教員申報　自明治二十一年九月　至明治二十二年七月』（『文部省往復（報告）』（明治二十三年）に所収）より引用

哲学、論理学、心理学、倫理学、審美学、哲学演習　教師ブッセ申報

千八百八十八年ヨリ千八百八十九年二渉ル一学年申報

第一学期

第一年級　哲学入門

第二年級　哲学史　中世哲学史、近世哲学史総論

論理学　応用論理学（完了）

第三年級　倫理学　倫理学総論（倫理学ノ観念及目的、諸倫理説ニ於ケル倫理ノ標準）

倫理学史略

第二学期ニ於テ行フベキ倫理学ノ演習ハ寄宿舎出火ノ為メ之ヲ行フヲ得サリキ

審美学　審美学総論（審美学的美ノ法則及所依、建築彫刻絵画音楽詩歌ノ目的）

美術史略（エジプシャン、アシロバビロニアン、インデアン、東方亜細亜、ペルシアン、グリーキ、及ローマン建築）

演習

カント著クリチック、オヴ、ピューア、リーズン、ノ講読

第二学期

第一年級　哲学史　哲学史総論、希臘哲学（セールスヨリソクラテースニ至ル）

論理学　論理学総論、純理的論理学（観念ノ解説、判断ノ解説）

本講ハ火災ノ為メ大ニ障礙ヲ受ケタリ

第二年級　哲学史　近世哲学（デカルトヨリカントニ至ル

本講モ亦火災ノ為メ大ニ障礙ヲ受ケタリ

第三年級　審美学　古代クリスチャン及バイザンテーン建築、アレビヤン、ロマネスク及ゴシック風、ルネサンス風、

本講モ亦火災ノ為メ大ニ障礙ヲ受クルコト前ニ同シ

演習　カント著クリチック、オヴ、ピューア、リーズンノ購読前期ノ続キ、別ニボウエン著近世哲学史、

ユーベルヴェッヘ、エルドマン、シュヴェークレル及ルトワィス等ニ基キテカント以後ノ近世哲学ノ演習ヲ行ヘリ

第三学期

第一年級　哲学史　希臘哲学（ソクラテース、プレトー、アリストートル、「ストイック」学派、「エピキュリアン」学派、懐疑学派、「ニオ、プレトニック」学派）

論理学　純理的論理学（完了）応用論理学

第二年級　心理学　心理学緒論、心理学上主要ノ問題ノ説明、心理学上著明ノ学説、精神物理学ノ法則

サレー著アウトラインス、オヴ、サイコロヂー、ヲ教科書トシテ用キタリ

哲学史　カントノ哲学ヲ完了ス

第三年級　審美学　第十九世紀建築、古代中世及近世ノ彫刻

演習　カント及其以後ノ近世哲学ノ演習前期ノ続キ、別ニカント著クリチック、オヴ、ピューア、リーズン、スペンサー著プリンシプルス、オヴ、サイコロヂー、ロッツェ著メタフィジック、ニ基キテ殊ニ空間ノインチュイション ノ起源及其自観的存在ニ関スル問題ヲ講究シタリ

以上各講義ノ詳細ヲ知ランニハ前学年ノ申報ニ就キテ見ルヲ要ス哲学入門、論理学、哲学史、倫理学、審美学（総論ノ部）ノ講義ハ其綱要ヲ記シタルモノヲ学生ニ与ヘタリサレー著アウトラインス、及其他本報ニ記シタルモノノ外一切教科書ヲ用キズ但シ審美学ニ就テハ専ラ図画ヲ示ス為メ参考書トシテズィーマン編纂クンストヒストリッシェ、ビルデルボーゲンリュブケ編纂デンクレーレル、デル、クンスト、リュブケ著ヒストリー、オヴ、アート、及シュナアゼ著ゲシヒテ、デル、ビルデンデンキュンステ、ヲ用キタリ

○資料五――教員受持学科表

東京大学の『年報』には、各教員がどの学年のどの学科を担当したのかを一覧で示した「教員受持学科表」（または「教員受持課目表」）が付表として収められている。ここではその表から哲学関係の学科に焦点を絞って抜粋する。なおその際、論理学を含む哲学関係の学科（論理学・哲学・哲学史・倫理学・審美学）を担当する外国人教師が哲学関係以外の学科（史学や政治学など）を担当する場合についても抜粋する。また日本人教師であっても、哲学関係の学科を担当する場合には同様にその列だけ抜粋する。

表中の〈　〉内の書き込みは、受講生の筆記ノートがどの外国人教師のどの年度の講義に該当するかを、筆者ができるかぎり推定したものである。その箇所はゴシックにして見やすくした。もちろん確定的なものではない。今後の研究の進展により表への加筆や修正がなされることになろう。（なお、申報をはじめとして関係資料と付き合わせると、もともとの学科表も完全な表ではなく、誤りや抜けがあると考えなければつじつまのあわない箇所がみられる。）

〈明治十年度〉

※明治十年四月に東京開成学校と東京医学校を併せ東京大学（四年制）に改組。旧東京開成学校が東京大学法理文学部となり、文学部には第一科の史学哲学及政治学科、第二科の和漢文学科が置かれた。二学期制。

『東京大学法理文学部第六年報』より一部を抜粋

東京大学法理文学部教授受持学科表　自明治十年九月至仝十一年八月　○於文学部第一科

（1）一学期（2）二学期

		第一年級		第二年級	第三年級	第四年級	教授
法学部		教授	第一年級	第二年級	第三年級	第四年級	教授
法学部	サイル	史学（1）					
法学部	外山正一	英語　論理学（1）　心理学（2）					
理学部	外山正一	論理学　心理学　英語					
文学部	サイル	史学（1）	史学				
文学部	外山正一	英語　論理学（1）　心理学（2）	○哲学史　○心理学				

〈明治十一年度〉

『東京大学法理文学部第七年報』より一部を抜粋

東京大学法理文学部教員受持課目表　自明治十一年九月　至仝十二年八月　○於文学部第一科

（1）一学期（2）二学期

	教員	第四年級	第三年級	第二年級	教員	第一年級
法学部					外山正一	英語　論理学（1） 心理学（2）
					サイル	史学（1）
					クーパル	史学（2）
理学部					外山正一	英語　論理学（1） 心理学（2）
文学部	外山正一			○心理学（1） ○哲学（2）	外山正一	英語　論理学（1） 心理学（2）
	フェノロサ		政治学　理財学	○哲学史	サイル	史学（1）
	サイル		史学（1）　道義学（1）	史学（1）	クーパル	史学（2）
	クーパル		史学（2）　道義学（2）	史学（2）		

〈明治十二年度〉

※この年度から三学期制。第一科は（史学を理財学に入れ替え）哲学政治学及理財学科、第二科は和漢文学科。

『東京大学法理文学部第八年報　自明治十二年九月　至明治十三年八月』より一部を抜粋

東京大学法理文学部教授受持学科表　自明治十二年九月　至仝十三年八月

	法学部		理学部	文学部			
				第一科			第二科
教授				**フェノロサ**	**クーパー**	外山正一	クーパー
第四年				政治学　理財学	哲学	哲学	
第三年				政治学　理財学	史学　道義学		史学
第二年				**哲学史〈坪内〉〈市島〉**	**史学　史論〈坪内〉**	心理論	
教授	外山正一	クーパー	外山正一	外山正一	クーパー		
第一年	英文学　心理学（前半年） 論理学（後半年）	史学	英吉利語　論理学（前半年）　心理学（後半年）	英文学　心理学（前半年） 論理学（後半年）	史学		

〈明治十三年度〉

『東京大学第一年報　起明治十三年九月　止仝十四年十二月』より一部を抜粋

東京大学法理文学部教員受持学科表　自明治十三年九月　至仝十四年七月

	教員	第四年	第三年	第二年	教員	第一年
法学部					クーパル 外山正一	史学 論理学、心理学、英吉利語
理学部					外山正一	論理学、心理学、英吉利語
文学部　第一科	外山正一	哲学		心理学	**クーパル** 外山正一	**史学〈阪谷〉** 論理学、心理学、英吉利語
文学部　第一科	クーパル	哲学	道義学　史学	史学		
文学部　第一科	フェノロサ	理財学	理財学　政治学	哲学史		
文学部　第二科	クーパル	史学				

〈明治十四年度〉

『東京大学第二年報　起明治十四年九月　止仝十五年十二月』より一部を抜粋

東京大学法理文学部教員受持学科表　自明治十四年九月　至仝十五年七月

	法学部	理学部	文学部			
			哲学		政治理財学	和漢文学
教員			外山正一	フェノロサ	フェノロサ	**フェノロサ**
第四年			哲学	哲学	理財学	
第三年				哲学	理財学	
第二年						**哲学史　世態学〈阪谷〉**
教員	フェノロサ 千頭徳馬	フェノロサ 千頭徳馬	**フェノロサ** 千頭徳馬			
第一年	論理学 論理学	論理学 論理学	**論理学〈金井〉** 論理学			

〈明治十五年度〉

『東京大学第三年報　起明治十五年九月　止仝十六年十二月』より一部を抜粋

東京大学法理文学部教員受持学科表　自明治十五年九月　至仝十六年七月

	法学部	理学部	文学部 哲学科		文学部 治政理財学科	文学部 文和漢学科	文学部 講典古甲科習部	
教員			外山正一	**フェノロサ**	**フェノロサ**	フェノロサ		井上哲次郎
第四年			哲学	哲学	理財学		第三期	
第三年					理財学〈**阪谷**〉	哲学	第二期	論理学
第二年			英文学、史学、心理学	**哲学〈金井〉**		哲学	第一期	
教員	千頭徳馬	千頭徳馬	フェノロサ	千頭徳馬	フェノロサ 千頭徳馬			
第一年	論理学	論理学	論理学	論理学	論理学 論理学			

〈明治十六年度〉（推定）

※『東京大学第四年報　起明治十六年九月　止同十七年十二月』の付表は「原本に欠落している」（『東京大学年報』第二巻凡例）ため、この年度の「教員受持学科表」は不明である。しかし教師の申報は『第四年報』の稿本（文部省提出用の浄書本の写し）に残存する。そこで本年度の申報に基づき、前後の年度の申報と学科表も参考に推定し作成してみた仮の表が次のものである。

東京大学法理文学部教員受持学科表　自明治十六年九月　至仝十七年七月（推定）

	法学部	理学部	文学部							
			哲学科		理政治財学科	文漢和学科				
教員			外山正一		**フェノロサ**	フェノロサ				
第四年			哲学		哲学	**理財学〈阪谷〉**				
第三年					**哲学〈金井〉**	理財学	哲学			
第二年			英文学、史学、心理学		哲学史	理財学				
教員	千頭徳馬	千頭徳馬	**フェノロサ**	千頭徳馬	フェノロサ	千頭徳馬	フェノロサ	千頭徳馬		
第一年	論理学	論理学	**論理学〈清沢〉〈高嶺〉**	論理学	論理学	論理学	論理学	論理学		

〈明治十七年度〉

『東京大学第五年報　起明治十七年九月　止仝十八年十二月』より一部を抜粋

東京大学法理文学部教員受持学科表　自明治十七年九月　至仝十八年七月

	理学部	文学部			
		哲学科		治財政理学科	文和漢学科
教員		外山正一	フェノロサ	フェノロサ	フェノロサ
第四年		哲学	哲学〈金井〉		
第三年			哲学		哲学
第二年		英文学、史学〈清沢〉〈高嶺〉、心理学	哲学〈高嶺〉〈清沢〉	哲学	
教員	千頭徳馬	フェノロサ 千頭徳馬			フェノロサ 千頭徳馬
第一年	論理学	論理学	論理学		論理学 論理学

〈明治十八年度〉

※明治十九年三月に東京大学と工部大学校を併せて帝国大学（三年制、医科大学のみ四年制）に改組。

『文科大学年報　自明治十八年九月　至明治十九年十二月』より一部を抜粋

文科大学教員受持学科　自明治十八年九月至仝十九年七月

哲学科			和文学科			古典講習科	
						漢書課	国書課
第一年	論理学		論理学、史学	論理学	論理学		
第二年	社会学、**哲学**	英文学、史学、心理学	心理学	哲学			
第三年							
第四年	**哲学〈清沢〉〈高嶺〉?**	心理学、哲学		哲学			論理学
教員	**フェノロサ**	外山正一	坪井九馬三	フェノロサ	千頭徳馬		外山正一

〈明治十九年度〉

この年度の「文科大学教員受持学科表」は、なぜか『文科大学年報　自明治廿一年一月　至同年十二月』にではなく、『医科大学第二年報　起明治二十年一月　止同十二月』の末尾に誤って収録されている。その一部を抜粋

文科大学教員受持学科表　自明治十九年九月　至仝二十年七月

	哲学科		和文学科	古典講習科	
				漢書課	国書課
第一年	論理学、哲学史、哲学	論理学、哲学史、哲学	論理学、哲学史、哲学		
第二年	哲学	哲学	哲学		
第三年	**審美学〈清沢〉〈高嶺〉、倫理学〈清沢〉哲学〈清沢〉〈高嶺〉**	審美学〈清沢・倫理学〉〈高嶺・倫理学〉哲学〈清沢〉〈高嶺〉			
第四年					
教員	**ブッセ**	**ノックス**	ブッセ		

〈明治二十年度〉

『文科大学年報　自明治廿一年一月　至同年十二月』より一部を抜粋

文科大学教員受持学科　自明治二十年九月　至仝二十一年七月

	哲学科	和文学科	史学科	博言学科	古典講習科	
					漢書課	国書課
第一年	哲学史、論理学	哲学史、論理学	哲学史、論理学	哲学史、論理学		
第二年	哲学史、心理学	哲学史、心理学	哲学史、心理学			
第三年	審美学、倫理学、哲学演習	審美学、倫理学				
第四年						
教員	ブッセ	ブッセ	ブッセ	ブッセ		

〈明治二十一年度〉

『文科大学年報　明治廿二年一月ヨリ　同年十二月ニ至ル』より一部を抜粋

文科大学教員受持学科表　自明治二十一年九月　至二十二年七月

		第一年	第二年	第三年	氏名
哲学科		論理学、哲学史	哲学史、心理学	審美学、哲学演習	ブッセ
国文学科			哲学史、心理学	審美学	ブッセ
史学科		論理学、哲学史	哲学史、心理学	審美学	ブッセ
博言学科			哲学史、心理学		ブッセ
英文学科		哲学史、論理学			ブッセ
独逸文学科		哲学史、論理学			ブッセ
特約生教育学科	倫理学				ブッセ

〈明治二十二年度〉

『文科大学明治廿三年報　自明治廿三年一月　至廿四年十二月』より一部を抜粋

※表ではハウスクネヒト（教育学・ドイツ話担当）が「第一年」の「哲学史、論理学」を受け持ったことになっているが、隣のブッセの行からの誤記である可能性が高い。

文科大学教員受持学科表　自明治二十二年九月　至仝二十三年七月

	第一年	第二年	第三年	姓名
哲学科	哲学史、論理学	哲学史、心理学	審美学、倫理学、哲学演習	ブッセ
国文学科	哲学史、論理学		教育学	ハウスクネヒト
	哲学史、論理学	哲学史、心理学	審美学、倫理学	ブッセ
史学科	哲学史、論理学	哲学史、心理学	審美学、倫理学	ブッセ
博言学科				
英文学科		哲学史、心理学		ブッセ
独逸文学科		哲学史、心理学		ブッセ
特約生	倫理学			ブッセ

注

1　東京大学史史料研究会編、『史料叢書　東京大学史　東京大学年報』（全六巻）、東京大学出版会、一九九三年（第一巻から第四巻）、一九九四年（第五巻、第六巻）

2　ノックスについては「講師履歴書」の在職期間の欄が空白になっている。しかし明治十九年度の『帝国大学第一年報』や『文科大学年報』などには記録があり、ここではそれに拠った。

3　ここに挙げた学生のうちで高嶺三吉については一般にはほとんど知られていない。日本で行われた最初の精神病学の講義を聴講しノートを残した者として一握りの専門家にその存在が知られているくらいであろう（『榊俶教授精神病学講義筆記録（高嶺三吉）：資料：開講一〇〇年をまえに』岡田靖雄、吉岡真二、長谷川源助、医学書院、一九八五年。『精神障害者問題資料集成 戦前編 第六巻：精神病学講義録／教科書（編集復刻版）』岡田靖雄ほか編、六花出版、二〇一一年）。二十六歳で夭折した翌年に友人らによって編纂された『高嶺君遺稿』（早川千吉郎編、明治二十一年、近代デジタルライブラリーで公開されている）には、彼の三つの遺稿とともに、「高嶺三吉君伝」という略伝と追悼文が収められている。略伝によれば、金沢の士族の家に生まれた高嶺は石川県立専門学校の文学科を卒業、同校で英語学の教員となったのち、奨学金を得てさらに学問を志して上京し、東京大学文学部に選科生として入学するが、明治二十年五月に脳症に罹り、卒業を目前にして七月六日に二十六歳で亡くなった。収められた遺稿は「印度哲学」「老荘の道徳と儒教の道徳との異同」「降霊術を論す（スピリチュアリズム）」の三つで、このうち「降霊術を論す（スピリチュアリズム）」は、もともと英文だったのを上梓に当たり同窓の友である徳永満之と岡田良平が翻訳した、と注記されている。

この『高嶺君遺稿』とは別に、東京大学時代の受講ノートが『高峯遺稿』（高嶺遺稿）として第壱から第七まで計七冊（二千数百頁、そのうち第六までは複数のノートを合本した大冊）にまとめられている。そこに貼られた寄贈文によれば、一周忌の命日に友人たちがこれを第四高等中学校に寄贈した。これが現在金沢大学付属図書館に所蔵されている高嶺のノートである。同図書館の梶井の報告（梶井重明「「高嶺遺稿をめぐって――西田幾多郎とカントとフェノロサ」『金沢大学付属図書館報 こだま』第一四二号、二〇〇一年七月一日）をきっかけに大谷大学の研究班がこれをデジタルデータ化し、現在その翻刻と分析を進めているところである。この高嶺ノートには、梶井も報告するように、本稿で言及する外国人教師の講義のほかに、上記の榊俶による明治十九年度の精神病（理）学講義や解剖及び生理学、十八年から十九年度の島田重禮の支那哲学、十九年度の吉谷覚壽の印度哲

学（仏教講義と天台四教儀）など、日本人教師の講義が（その第壱冊に）含まれている。それとまったく同じ講義や年度違いの講義が清沢ノートにも含まれており、今後この方面での調査が進展することも期待される。

4 十一月九日という日付については、『東京開成学校第二年報　明治七年』の記述（「十一月十九日英人サイルヲ修身学教授トス」）に従わず、「講師履歴書」に従った。『資料　御雇外国人』（小学館、一九七五年）のサイルの項目も十一月九日と記されている。

5 小澤三郎『日本プロテスタント史研究』東海大学出版会、一九六四年、第十三章「開成学校御傭教師 EW サイル」。重久篤太郎『お雇い外国人五―教育・宗教』鹿島出版会、一九六八年

6 三宅雄二郎「明治哲学会の回顧」『岩波講座　哲学』一九三五年

7 高田早苗『半蜂昔ばなし』早稲田大学出版会、昭和二年

8 山口静一「東京大学におけるフェノロサ(4)―担当学科と講義内容―」『埼玉大学紀要　外国語学文学篇』第六巻、埼玉大学、一九七二年；山口静一『フェノロサ』三省堂、一九八二年；山口静一『フェノロサ社会論集』思文閣出版、二〇〇〇年

9 なお明治十七年度のフェノロサの申報は『東京大学第五年報』にも載っておらず、それ以降の申報についても確認できていない。

10 秋山ひさ編・解説『フェノロサの社会学講義』神戸女学院大学研究所、一九八二年

11 なお清沢ノート（F048–049）には、講義の書き取りか、あるいはむしろ自習の跡であろうか、ジェヴォンズ『論理学の初歩』の注と章末とに指示された参考文献が網羅的に抜粋されたり、ファウラー『演繹論理学の初歩』やド・モルガン『形式論理学』の本文から大量に要約的に抜粋されたりしている。ファウラーは明治八年の『第三年報』や明治九年の『第四年報』に教科書として挙がっている。Thomas Fowler, *The elements of deductive logic: Designed Mainly for the Use of Junior Students in the Universities*, Oxford: Clarendon Press, 1867、Augustus De Morgan, *Formal logic, or, The calculus of inference, necessary and probable*, London: Taylor and Walton, 1847.

12 哲学史を学ぶにあたり清沢が自習したと思われる跡がノートのあちこちに残る。その主なものをここで挙げておく。ノート（F073–075）にはシュヴェーグラー『哲学史便覧』の古代から近世までの大量の抜粋と、ルイス『タレスからコントまでの哲学史』の目次の網羅的抜粋がある。早くからフェノロサはこれらを参考書に挙げている（たとえば明治十二年度申報）。Albert Schwegler, Handbook of the History of the Philosophy, tr. James Hutchinson Stirling, Edinburgh: Edmonston&Douglas, 1867.; George

Henry Lewes, The history of philosophy from Thales to Comte, London: Longmans, geen, and co.. 1807. またノート（F113）にはボウエン『近世哲学』序論の前半（十七世紀の哲学）からの抜粋と、ドレイパーの『ヨーロッパの知的発展の歴史』のほぼ第七章まで（おもに古代ギリシア哲学）の目次と傍注の抜粋がある。フェノロサの師であるボウエンの著書は明治十三年の『一覧』に参考書として挙がっている。A. M. Francis Bowen, Modern philosophy from Descartes to Schopenhauer and Hartmann, New York: Charles Scriber's Son, 1877.; John William Draper, *History of the Intellectual Development of Europe,* Volume I (of 2), New York: Harper & Brothers, Publishers, 1876.

13 村形明子編「清沢満之筆記フェノロサ「哲学」講義録」『Lotus』二八、日本フェノロサ学会、二〇〇八年。フェノロサ講義「哲学史―ヘーゲル論（清澤満之筆記）」（上）、日本ヘーゲル学会文献資料委員会、守津隆（担当）、山口誠一（協力）、『ヘーゲル哲学研究』十七、日本ヘーゲル学会編、二〇一一年、二〇一-二一五頁。なお村形明子（二〇〇八）により翻刻された部分は、高嶺の記した日付によると、明治十八年一月十三日から三月五日までの十五講に相当する。

14 ノートでは13. Feb.となっているが、次が15. Jan. その次が20. Jan., 22. Jan., 27, Jan., 29, Jan., 3. Feb. と続くから、13. Feb. は13. Jan. の書き間違いであると判断される。内容的にもそうみるべきだろう。

15 この明治十二年度からは外山正一も文学部四年生の哲学の講義を開講して、クーパーやのちにはフェノロサとこれを分担する形になる（「教員受持学科表」を参照）。これは山口（二〇〇〇）に引用される明治十三年度の『東京大学法理文学部一覧』で、文学部四年生の哲学講義を甲乙の二種に分ける、としていることに対応する。ただし外山のその哲学講義（甲の講義）の内容は、その後の『一覧』や外山の申報によると「心理学」（明治十三年度や十五年度の申報では「心理学の高尚な部分」）であり、具体的には人間と動物の精神の比較、知力や感情の進化、道義の大本等（十二年度の申報）といったものである。

16 フェノロサ講義「哲学史――ヘーゲル論」（阪谷芳郎筆記）、日本ヘーゲル学会文献資料委員会、山口誠一（解読・解説）・守津隆（解読・翻訳）『ヘーゲル哲学研究』十五、日本ヘーゲル学会編、一五九-一七一頁、二〇〇九年

17 坪内は明記していないが、この部分の筆記は次の二つの百科事典の記事から抜粋されたものである（ただし使用の版は不明）。

(1) *Supplement to the fourth, fifth, and sixth editions of the Encyclopaedia Britannica: With preliminary dissertations on the history of the sciences,* Edinburgh: printed for A. Constable and co., 1824, Vol. 3: pp. 94-5（China の項）、

(2) *Penny Cyclopaedia of the Society for the Diffusion of Useful Knowledge,* London: Charles Knight & co., 1840, vol. 16: p.

20（Music の項）。

18 柳田泉『若き坪内逍遙　明治文学研究Ⅰ』春秋社、一九六〇年（日本図書センター、一九八四年復刻）

19 なおノックスが創立期から深くかかわった明治学院大学にはのちに歴史資料館が付設され、ノックス関係の資料を所蔵するが、哲学・倫理学関係の原稿やノートが所蔵されているかどうかについて同館に調査を依頼したところ、二〇一一年九月の段階では所蔵は確認できないとの報告を得た。

20 一回目は 'Ethics v. I by S. Takamine 22/Sep./83.' 二回目は 'II Ethics 27./Sep./83.' と記されているが、まさかこの二回分だけが別の時期の（時期的にフェノロサの）講義ということではなかろう。おそらくは、たんに 86 を 83 と書き誤ったのであり、三回目の 'III. Lecture of Ethics. 28./Sep./86.' へ続くのであろう。

21 明治十九年度の教員受持学科表では、ノックスの欄に倫理学はなく、審美学と記されている。

22 『清沢満之全集　第四巻　哲学史研究』（岩波書店、二〇〇三年）所収。

23 'History of Philosophy. vol. I. by. Buslu Belong to S. Takamine 2. Feb.' という頁にはじまる。Buslu と読めるが、Busse の講義であろう。日付についていえば、vol. II が 20. March/86、vol. III が 20. April. 86 となっているが、86 は 87 の書き間違いか一八八六年度のこととみなければブッセの着任時期とつじつまが合わない。つまりこの哲学史のノートは、一八八七年二月二日から四月二十日の頃のブッセの講義を筆記したものであろう。頃のというのは、全部で三回の講義であったはずはなく、何回か分の講義をまとめて都合三度にわたって清書しているように思われるからである。

24 日付についていえば、高嶺ノートの Aesthetics vol. I. が 31. Jan.、vol. II が 8. March./86、vol. III が 10/May/86 となっているが、やはりここも 86 は一八八六年ではなく一八八六年度を指すとみるべきだろう。つまりこの審美学のノートは、一八八七年一月三十一日から五月十日までにブッセの講義を筆記したものである。

本稿は二〇一〇－一二年度日本学術振興会科学研究費（基礎研究（C））による研究成果の一部である。